
世界を跨ぐ英雄

十六夜零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を跨ぐ英雄

【Nコード】

N6821P

【作者名】

十六夜零

【あらすじ】

神に殺され使い魔になった少年！鍛えて跳んで最強な主人公の笑いあり涙あるかも！？な原作破壊の冒険！

この作品は処女作です。オリ主最強が含まれます。苦手なかたは回れ右！

書き方がよく変わると思いますが、テストを含めて変わる場合がありますのでご了承ください。

一話 始まりは御決まりの殺人事件（前書き）

初めまして十六夜零です。行き当たりばったりな書き方ですので不定期更新ですが頑張りますのでよろしくお願いします。

一話 始まりは御決まりの殺人事件

俺はやりたくもない勉強をするために近くのコンビニまで夜食を買いに来ていた。

「あゝ漫画みたいな衝撃的な出会いとか体験してみてえなあ。」
なんて微塵も期待していないことも口走って閉まったことに今更
気恥ずかしくなり、気分転換に遠回りだが大通りを歩く。

そついやモ ハン3rdかわねえと、なんてどうでもいい事を考え
ながら歩いていく。夜中なので人通りは少ない。ポケットからiP
odを取りミクの曲を聞きながら帰路につく。

横断歩道を歩きながら聴いているとナニ力が滑るような、嫌な音が
聞こえ振り返ると…

- - -俺は4？トラックとそれはもう衝撃的な出会いを果たした。

「知らないで…天井がない…だとっ!？」

なんで天井ねえんだよ。人生で一度は言っておきたいランキング3
位に入る台詞なのに…。

「あのゝそろそろ話をして宜しいでしょうか？」

不意に後ろから声をかけられて振り向くとなんか幼女がいた。

「幼女言うな！せめて女の子とか言ってくれない？」

まあそれは置いといてさっきまで誰もいないと思ってたんだか…ま
あこんな不思議空間あるくらいだし、そんなぐらいでありか…。

「で、その女の子（幼女）は俺になんか用でもあんのか？俺は寝た
いんたが。」

「さっきまで驚いてた人がよくいいますね…。あと幼女じゃありま
せんっ！」

「で用件はなんだ？俺が死んだことに関係あるなら聞いてやらんこ
ともないぞ？」

俺がそういうと女の子（幼女）が姿勢をただして…

土下座をした。つてはあ?!なぜに土下座!?俺に幼女虐める趣味はねえぞ!

「あなたの趣味はともかく、申し訳ありませんでした!」

あれ?なんか二次創作とかで読んだことあるぞ、この展開…。つーことはまさかっ…

「こちらのであなたを殺してしまいました。」

マジか…。まあトラックにひかれて今自由に動けてるのがおかしいんだしな。

「御詫びと言つては何ですが転生先の決定権があなたにあります。」

「あれ、チート能力とかは?」

「可能ですがそれなりの役目を果たしていただくことになりますよ?」

「一応どんなのか教えてくんねえか?あと敬語やめてくれ。」

「えと、今更何ですが殺してしまつた件にはノーリアクションですか…?」

おお!転生とかで忘れてた。まあいいか。

「小さいこと気にしてたら上には上がれねえぞ、幼女。」

「でどんな役目だ?」

「幼女はやめてください。それで役目だつた?完全に私情何だけど、たまに別の神が醜い欲望もつた転生者送ってくるのよ。そいつ始末してくれればいいよ。」

そんな神いるのかよ。迷惑な奴もいるもんだなあ。

「でもそれだけか?そんなの楽勝じゃないか。」

それなりって言つてたからもつと過酷なのを予想してたんだが…。

「そんなことないわよ。そいつ等を送つたのも神なのよ?チートな能力持つた奴ばかりよ。」

嫌そうに顔を歪めながらそう言う。そこまでなのか…。対策してかなきゃならんな。

「その役目は引き受けよう。だが能力に制限はあるのか?」

「貴方は立場私の上の使い魔のようなものになるの。私に攻撃できな

いようにするけど、それ以外は特にないわね。」

これは…予想以上に好条件だな。だが努力しないでチートになるのは俺の主義に反するから

「チートに勝つんだぜ？人間じゃ限界があるからな。なにかいい種族あるか？」

百年位しか生きれないからな。鍛えようがねえ。

「定番なんだけど真祖吸血鬼とかはどう？不老不死だし、魔力とか筋力とかの基礎値も高いわよ？」

吸血鬼か…。カッコいいな。青少年の憧れじゃないか。

「じゃあそれでいいや。次は能力なんだが少し考えさせてくれ。」

「まあいいわ。五分だけよ？」

~~~~~五分後

よし！だいたいまとまったな。

「そろそろいいかしら。」

幼女はいつのまにかメモ帳とペンを装備している。

「ああ。まずは魔眼だ。直死の魔眼をくれ。」

「直死の魔眼ね。でも私の線は見えないようにしておくわよ。」  
結構気にしてたんだが、制限はないか。

「次は才能をくれ。あらゆるものだ。はじめは弱くてもかまわな  
いが満遍なくたのむ。」

「なんか次の要求が予想できてきたわ。まあこれも大丈夫よ。でも、  
満遍なくだとはじめは最弱よ。」  
やっぱりそうなるよな。

「了解、あとはまとめて言うぞ。限界突破。まあ名前通りだ。次に  
平行世界とかの魔法を使えるようにしてくれ。あとは物を頼みたい  
んだが…」

これで断られたらさっきの五分が無駄になってしまうからな。

「嫌よ！…って冗談だから拳握らないでっ！」

まったく、ふざけたこと抜かしたから思わず殴る所だったぜ。

「用意してほしいのは刀一つと大剣二つ、銃二丁それと時間差を設定できる別荘をくれ。」

こんなもんかな。少し欲張り過ぎたか？まあコッチは殺されたんだし良いか。

「了解。王の財宝的なものあげるから入れておくわ。」  
「ラッキー！さてほしい物はこれくらいかな。」

「これでかまわん。よろしく頼むぞ幼女。」

「幼女じゃない！まあいいわ。武器については私の武器から選んでおくわよ。じゃあ逝ってきなさい。」

ゾクツ　なんか嫌な予感が…。神（幼女）が指を鳴らすと扉がでてきた。

「まあ、サンキューな。俺殺されたけど…。」

そう言い扉をくぐると浮遊感が、って穴がある！後ろをみると神がニヤニヤしていた。嫌な予感はいったのか！

「こんのクソ幼女がああああああああ！！」

こうして俺の異世界生活は始まった…。

一話 始まりは御決まりの殺人事件（後書き）

ネギま！の世界に行きます。知識は一時創作ですので作者は原作を  
読んだことはありません。  
稚拙な文ですかよろしく。

誤字脱字などあれば報告お願いします

二話 二つの始まり、二つの出会い（前書き）

どうも十六夜零です。

二話目投稿です。

改めて言いますが作者の原作知識は二次創作のみです。

## 二話 二つの始まり、一つの出会い

「ここは…リゾート地か？」

俺の周りには湖、山、城、川、樹海、海やらが広がっている。

考え込んでると上から紙が降ってきた。神からのようだ。

『無事ついたみたいね。そこはあなたの別荘の中よ。時間の流れは城のあなたの部屋にある装置でかえられるわ。それとあなたはもう吸血鬼何だけど神様サービスで高速回復をつけといたわ。あと生前の名前は使えないわよ。容姿は…お楽しみ（はあと）』

容姿は変わってるってことか。王の財宝から鏡をだしてみると…長い銀髪のおねえさんがってこれまさか俺!?

長い銀髪、165cmくらいで少しつり目の女。リリなののリインのアインスかな。胸のない。するとまたしても空から紙が…

『容姿はやっぱり男の娘だよー。』

ビリリ ポイ

つかこの容姿なのに男のままか。よかったのか? まあ気にしないからいいか…。

気を取り直して時間差設定しなくちゃな。

~~~~~自室

まさかあんなに分かりやすいとはなあ。道に矢印あったし、

「どれ押すんだ? ……ふむふむ。このボタン押しながら言えばいいのか。」

どのくらいがいいだろうか。

まあ分かりやすくまず

『時間設定変更。中の一日を外の一分に!』

とこんなものかそういや途中で図書館あったよな。よし暫くそれで時間潰すか。妖怪は生きてるだけで妖力は増えるって聞いたことあ

るしな。

~~~~~20年後

長かった…まさかあそこまで多いとは思わなかった。妖力は1.5倍位じゃねえか？よし次は体力と筋力だな鍛えるぜええ！

~~~~~10年後

やべえ。限界ないつてここまでチートなのかよ。はじめ板折るのがやっただったのに今じゃ、正拳突きで湖割れるぞ。

次は直死を使いこなさなくてはな…

~~~~~城の裏庭

木の正面で魔眼をONにする。

すると視界は線と点で埋め尽くされる。

「っ！？がああああああああ！！」

頭が割れると思うほどの痛みに襲われる。

これがこの目の副作用かっ！確か脳に負担がかかってるんだっただな。限界突破で克服できるだろが…これはヤバいつ。ああなんか感覚消えてきた……。

俺はそのまま意識を失った…。

ああー。頭痛えー。副作用とはいえあれはひどいな。だが、俺が目を覚ますと頭痛はもう治まっていた。限界突破がなんとかしてくれたのか？まあだるいし今日は飯食って寝よ。

~~~~~翌日

「そついや此処は何の世界だ？外に出てみるか。」
「たしか此処から出るには…」

「システム起動！行動選択”帰還”！」

さあ！どうやって原作を壊してやるうか。

~~~~~エヴァ said

わたしが朝おきたら、魔法陣（？）の上でねてた。

「フハハハハハ！やっただっ！やっど完成した！」

完成？何かを作ったのかな？あれ、なんか体が変な感じがする。

まるで体だけ私でないような…。

さっきの男の人が私に気づいた。

「おや、目が覚めたかな？エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。」

「どうしてわたしはこんな所にいるの？それになんか体が変な感じがするの。」

すると男の人は心底おかしそうに笑い始めた。

「ー怖い…」

「ハハハハハ！まだわからないのか？エヴァちゃん。」

ダメツ！此処から先は聞いちゃだめ！何かが終わっちゃう気がする！

其れでも男は喋ることはやめず、まるで物わがりの悪い子を諭すように言葉を紡ぐ。

「君はね、もう人間などではなくなっただよ。誇り高き最強種の

真祖の吸血鬼になったんだよ！」

信じたくない…。でもまるでパズルのピースを埋めるように、違和感が解消されていく。

「さあ。まだ検査があるんだ。怖くないから、じっとしててね。」「  
そう言い男の人は手を伸ばしてくる。」

私は怖くなった。心がその男の手を拒絶している。  
そして人外になってしまったという事実が怖くて仕方がなく…

「や…こないで…。」

「どうしたの？不具合がないか調べないと。おとなしくしてなさい。」

「いやっ！来ないでっ！来ないでよおお！」  
近づいてくる手を振り払う。すると男は叫びだした！私の頬には生  
温い水がかかる。

「ぐあああああっ！腕がつ！俺の腕がないっ！」  
見ると男の腕がない。しかもそこは私が振り払ったところ…っ。

「いやあああああっ！」

怖かった。だから逃げた。見慣れてるはずのお城が怖い。だから、  
逃げた。

気がつけば森にいた。

「はあ…はあ。ここ何処？」

暗い。もう夜だ。そのはずなのに…私の目は遠くまで見渡せる。  
私…化け物になっちゃったんだ……。

周りを見回すと山小屋が光ってる。

「なんだろ…。誰か居るのかな？」  
わたしを受け入れられる。そんなありえないとおもっような希望（  
幻想）を抱きながら扉を開いた。

~~~~~主人公said

別荘から出ると、まあなんとというか暖炉とベッド、テーブルだけの
質素な家だった。テーブルに神の物と思われる手紙。

『いや、悪いとは思ってるけど森の中に豪邸は無理。
あとここはネギま！の世界よ。』

ネギま！か…。ネギとか正直気に入らんからなあ…。矯正してやる
のもいいな。

『あと原作の600年前よ。好きなように動きなさいよ。お金は倉
に大量なあるわよ。泣いて感謝しなさい。』

600年前か…。なにかあったか？えーと確か…。そつだ！エヴァが吸
血鬼にされた年だ！

「まあそれはなんとかなるだろ。金もかなりあるみたいだし。」

ギィとドアが開いて金髪の子供が顔を覗かせてる。

「どつしたんだい、お嬢さん、そんな格好で。」

頭にはてなを浮かべたが自分の姿を見た瞬間、顔を真っ赤にさせた。

気づいてなかったのか？となると…

「格好を忘れる位なんだ。なんかあったのかい？」

途端、お嬢さんは泣きだした。

「どうした！？なんか気にさわるようなことあったか！？」

全くなんだってんだ！？

このあと俺がお嬢さんを泣き止ませるのに四苦八苦したのは言うまでもない。

二話 二つの始まり、一つの出会い（後書き）

という訳で今回はエヴァと主人公の出会いまでです。

ええ、主人公の名前はまだ決まっていませんよ…。

分かってると思いますがエヴァがメインヒロインですよ。

作者はエヴァが大好きです。

みなさんはどうでしょう？

ではみなさんまたお会いする日まで、お元気で。

三話 新しい家族、俺の覚悟（前書き）

三話投稿

シリアスです。ええシリアスですとも。

三話 新しい家族、俺の覚悟

「で、お嬢さん、名前は？」

俺は、何とか泣きやませやっとな話を聞けそう。

「えぐ…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル…。」

マジかよ！？この子がエヴァなのか？…可愛いな…。どうなったらあんなひねくれるんだ？

「じゃ、エヴァって呼ぶな？なんかあったのか？」

「ひつく…えとね……………」

~~~~~ 幼女説明中

うわぁ予想以上にひどいな。

「それでね…わ、私、吸血鬼にね、なっちゃったの。それで、私怖くなつて…」

まだ震え、泣きながら話そうとするエヴァを優しく抱きしめる。

「いいんだ。もうなにも言つな。よく我慢したな。」  
「ひぐつっ、うわぁああああああああん。」

エヴァは泣き続ける。それを見て俺は想った。



すげえ微妙だ…。

「それでエヴァ、これからどうするんだ？言っちゃ悪いが、今まで通りは生きていけないぞ？」

エヴァは俯いてしまった。少し直球過ぎたか？

「エヴァがいいのなら、俺が鍛えてやろう。」

「本当？一緒にいていいの？」

「ああ。と、忘れてたが俺の名前はレイン。それでエヴァ、どうする？」

「家族。鍛えるとか、そう言うのじゃなくて、家族になって。」

家族か…。ははは、ハズいがうれしいもんだなあ。エヴァを見ると涙目になってる。か、かわいいっ！

「やっぱり…ダメ…？」

「いや、家族なんて居なかったから嬉しくてね。じゃあ俺はレイン・マクダウエルになるのかな？」

そういうとエヴァは顔を赤くして俯いてしまった。

「うん／＼あ、あのね。私のことキティって呼んでほしいな／＼／＼」

「わかった。これからよろしくな、キティ。もう今日は寝よう。」

「うん。でもベットは一つしかないよ？」

あ、すっかり忘れてた。

「じゃあ明日買いに行こうか。今日は俺が床で寝るよ。」

「だめだよつ。えと／＼一緒に寝よ？／＼／＼」

「ふふふ。キティは可愛いなあ。分かった。じゃあ、お休み。」

「うん。お休みなさいレイン／＼」

キティが背中を抱きついてくる。もう寝たかな。さあゴミ掃除の時間だ。

今夜は満月。おもいつきり暴れてやる。キティは気づいて話題に出さなかったと思うが、キティの両親は恐らく殺されてるだろう。

その男、許すつもりはない。その血、最後の一滴まで殺し尽くしてやるつ。

~~~~~レーベンスシユルト城

銃二丁を出し窓を破り乗り込む。この銃はヘルシングでアーカードの使っているのを少し大きくした奴だ。ミスリルとオリハルコンを使って作られている様で、近接戦闘もこなす優れものだ。ミスリルの方には魔力、オリハルコンの方には妖力を使い魔弾を打ち出す。俺には重さはあってないようなものだが一応20キロくらいある。銃に妖力を込める。そして撃つ！

出てくるのはマスペレベルの砲撃だ。

驚いた様子の白衣の男が出てきた。

「エヴァンジェリン。この名に覚えは？」

少し殺気を出すのが怯まない。そして笑いだした。

コイツ、もう頭逝ってやがる…。

「アハハハハハハハハハツ！よく覚えてるよ。僕の実験材料だよ！
彼女はどうしている？吸血鬼となっ「黙れ！」あがつ」

口に妖力銃を突っ込む。

「ああ、イライラする。なんでだろ、そうだ。おまえが喋るからだ。
じゃあどうしよう。そうだお前を壊せばいいんだ。暇だし、ただ壊
してもしょうがないなあ。そうだ、拷問の練習をしよう。」

いい学習の時間になりそうだ。

まず魔力銃で両手のひらを撃つ。ついでに妖力銃を口から抜く。

「クヒヒヒヒ、ぐっ！カハハハハ」

「チツ！気色わりい奴だ。完全にイってやがんな。拷問やめだ。」

同時に両方の銃に魔力、妖力を込め、城が壊れない様に外に蹴り出
す。そして

「消える、疑似符『ファイナルマスタースパーク』」

「クヒヒヒヒ、クハハハハハ……」

俺は真祖についての資料を王の財宝に入れ、死体を火葬して、城と
と王の財宝に突っ込む。

「あれ？俺ってあんな性格だったか？なんかすげえ変わった気が
……。まあいいか。」

俺は離れの風呂に入り着替え、キティの隣に入る。

そして額にキスをする。

「おやすみ、キティ」

~~~~~翌日

昨日、俺は初めて人を殺した。後悔などはない。それは悪いことなのかもしれない。だが、俺は殺し続ける。転生し、守りたい者を見つけた。だから俺は持つ力を使おう。守り続けよう。殺し続けてやろう。

「おはよう！レイン。」

この笑顔を守るためならば…

「おはよう。キティ。」

### 三話 新しい家族、俺の覚悟（後書き）

という訳で今回は主人公の覚悟についてです。  
シリアスはここらでひと休みです。

主人公はFFと東方から魔法や技を使う予定です。

では皆様、また会う日まで、お元気で

四話 時間経過は速いもの(修正済)(前書き)

誤字修正しました。 12/30 22:03

次話は明日投稿できるかな？

#### 四話 時間経過は速いもの（修正済）

あれから10年が経った。え？飛ばしすぎ？だってひたすらに旅しながら鍛錬しまくっただけだけ？

まあこの10年で立派な賞金首になりました。二つ名もついたぜ？

『狂美の銃騎士』だとき。美はもう慣れた。狂がつくのは戦いになるとなんかハイになっちまうからだ。

銃騎士はキティ守りながら銃で殺ってたら付いた。

キティは『闇の福音』。まあ原作通りだな。新しいのは『冷徹の主君』。氷魔法ばかり使ってるからだな。合わせて『狂冷の主従』とか呼ばれる。

んで俺がいま何してるかと言うと、

「15歳位までだぞ？効果が本当にでるかも分からんからな。」

「大丈夫、レインを信じてるから。」

キティを成長させる方法が見つかったので試しているところだ。

『我が魔力よ、加速せよ！動かぬ時共々全てを速めよ！汝、彼の者の肉体の時を速めよ！』

唱え終わるともに魔力がキティを包む。そして光が消えると、身長が15cmほど伸びてた。

「よし！成功だぞつ、キティ！」

「ほんとだ。背が伸びてる！ありがとう！レイン！」

そういつて俺に抱きついて来る。今の魔法は時間魔法と呼ばれるものを解析、改造をして作った。詠唱はいらないのだがイメージ力を

上げるために適当に作った。

時間魔法については、別荘の本に書いてあった。

そしてそれと平行して俺はある物を作っていた。それを今夜渡すつもりだ

~~~~~夜

「キティ、これあげる。」

「これは…別荘？ありがとう！大変だったでしょ？」

「まあ待って。中に入れてみなよ。」

不思議がるキティと共に別荘に入る。そこにはデカイ城があった。そう、レーベンスシュルト城だ。

「この城は…」

「そう。あのレーベンスシュルト城だよ。」

「レ…イン。ひぐ…ありがとう…。ほんとにありがとう。」

「キティの為だ。この位安いもんさ。」

キティは何かいいたそうにしてこちらをむく

「レイン、あのね。お願いがあるの。」

「キティがお願いなんて珍しいね。なんだい？」

「わ、私と仮契約してください！／／／／／／」

驚いたな。キティから言ってくるなんて。

キティの魔法知識は俺が別荘からネギまの世界の本だけ渡している。

「ダメかなあ？」

「何言ってるの？キティ。いいに決まってるじゃないか。少し待ってね。」

俺は暇潰しで鍛えていた鋼糸を使い、陣を書く。

「おいで、キティ。」

ゆっくりとくる。そしてどちらともなく腰を抱き、唇を近づけ、重なる。

重ねるだけのキス。ただそれだけを仮契約の光が消えても続ける。10秒とも1時間とも想えるキスを終え、俺は唇を離す。あつ、とキティが悲しそうな声をだす。

「キティ、カードを。」

「あつ／＼／うん。はい、カード。」

複製したカードを見る

『マドイクルウカネ』 惑い狂う鐘

「レイン、どんなのだった？いきなり固まって」

「恐らくやばいもんだ。アデアット」

形はハンドベルか。能力は…恐らく名前通りだろうな

「鐘の音が届く範囲の敵に超リアルな幻術を掛けれる。」

「うわあー。かなりエグいアーティファクトだね。」

みたいなことがあった。アーティファクトは封印。あんなのあったらつまんねえじゃん。

そして久しぶりに直死使ってる（作者が忘れてた）。魔法も殺せるみたいだし、右手に銃、左手にナイフを構えて戦えるようにだ。

キティは闇の吹雪までは無詠唱できる。キーも原作と同じ。

そんな感じで2000年後

「フハハハハ！雑魚が何匹集まっても同じだ！チャチャゼロ！」

「ケケケ、切り刻ンデヤルヨ。」

「俺にも残してくれよ、キティ。最近殺し足りねえんだよ。」

俺とキティ狙ってきた討伐隊を返り打ちにしています。

キティは広域戦滅魔法を連発してるから、俺とチャチャゼロに回ってこない。

口調は無理だった…。まあたまに元に戻るから原作よりはいいだろう。

賞金は俺が200万\$、キティが50万\$だ。キティのが少ないのは、俺が滅多に戦わせないからなのだが、今回は派手にやってしまったからな。かなり上がるだろ。

住むところは王の財宝に家をいれてるから、森の中とかに出して、豪華な住宅の出来上がりだ。

またまた2000年後。

「正義の名の元に死ねえ！！」「うぜえ。グラビガ。」「ぐああああ。」

相変わらず賞金首狩り（馬鹿）が攻めてくるが、以前と比べれば少ない。最近だらけてるからな。

今回はキティはおやすみ中だ。まったく、キティの睡眠の妨害をするとは。つい魔法を使ってしまった。

俺は基本、直死で線を切って遊びながらやっている。まあたまに銃で死の点撃つけど。スペカは滅多に使わない。あれは遊びの時かな？FFはよく使うよ。だってあれ詠唱なしあの威力だよ？使わない手はないっしょ。

日が沈む頃に全員を殺し終えた俺は、家に帰った。

「遅いぞ、レイン。何処にいつてたんだ？」

「ゴミ掃除。まったくキティとの睡眠を邪魔しやがったのでな、潰してやった。」

「なにかあつたら言えよ。……起きたらいないから心配したじゃないか（ボソ）」

「ん？なんか言ったか？」

「なっなんでもない！／＼／＼／＼／＼／＼／」

ふふふ。聞こえてるぜ？俺はキティの耳元で意地悪そうな笑みを浮かべ、

「心配してくれてありがと。キティ」

「っ！？／＼／＼レ、レイン！からかうな！／＼／＼／＼／」

ギャルゲの主人公じゃねえんだ、キティの気持ちも理解している。だが、俺は一人を愛し続けられるほど器用じゃない。

キティは俺としても愛しているが、自分で言うのは恥ずい。いまんとこ現状維持だな。

「さて、飯にするかな。キティは何が喰いたい？」

「ふむ、前食べた日本の味噌汁が食べたいな。」
「りょーかい。風呂にでも入って待っていてくれ。」
「わかった。楽しみにしてるぞ。」
「もちろん。キティの為だ。最高のものを出そう」
「／／／………ありがと／／／／／」

原作もいいが、こんな生活も捨てたもんじゃねえな。

俺は素直にそう思った。

だが俺はこのとき忘れていた。この世界に来る前、アイツに教えられた存在のことを…

四話 時間経過は速いもの（修正済）（後書き）

次話は初の戦闘描写！

巧く書きたいものです

五話 襲撃！そして新たな誓い（前書き）

五話投稿です。

正月前にまにあいました。

今回は初の戦闘描写です。

どうでしょう？

五話 襲撃！そして新たな誓い

俺はある男と戦っていた。相手の周りには浮かぶ剣があり、すべてが俺を狙っていた。
俺とそいつは同じくらい血まみれだ。

数時間前まで俺はいつも通りの日常を満喫していた。だが、それも終わりを告げた

~~~~~五時間前

料理をしていた俺の前に手紙とイヤリングが現れた。まあアイツだろ。

『そつちに今転生者の反応がみれたわ。善悪は視れないから、恐らく悪だけどそのイヤリングを使ってちょうだい。それで思考をみることができるわ。強力だけどあなたは悪用しないと信じてるわ。あと警戒を怠らないでね。じゃ健闘を祈るわ。』

ついに来たか。準備をしていかなくてはな。取り合えず念話でキティに行つとくか。

『キティ、野暮用だ。少しでる』

『…詳しくは聞かんが、……無事かえってこいよ。』

『俺を誰だと思ってるんだよキティ。まかせな』

さて、死合に行くか。

妖力銃のソルと魔力銃のルナを取り出す。  
そして転生者らしき反応の前まで転移する。

そこにはギルガメッシュの容姿をした男がいる。幸いまだ気づかれてないので思考を読む

「……なんだ！？これは！聴くだけで気持ちわりいなあ！  
決めた。全力で殺す。  
幻術で姿を変え話しかける

「その人、こんな所でなにをしている？」  
「ああ。すみません。旅をしている者なのですが、町はどちらにあるのでしょうか？」  
「ふふふ。ご冗談を。その醜い欲望をまず消しなさいな。」バババババババ！

撃つ！撃つ！撃つ！ひたすらに撃ち続ける！

「チツ。貴様、何者だ？」  
「やつと本性現したか。転生者」  
「つてことはお前もか。なぜ俺を狙う？お前も目的があるんだろ？」  
「神からの依頼だよ。お前みたいなゲスが沸いたら始末しろと、なつ！」

いいながらマスパを撃つが、

「くつ！全て遠き理想郷アウアロン！！」  
「わお。この程度で 全て遠き理想郷 かよ。魔力の無駄だろうにな。」

「投影開始。我が骨子は捻れ狂う！偽・螺旋剣ガラドホルグ！！」

「うお！無視かよ。んじゃファイラ！」

横に跳び、避けながら通常より大きめの炎をぶつけてやる。だが、あっさりとかわされる。

「遊んでる暇があるのか？ゲス。さつさと本気を出しやがれ！」

「チツ！お望み通り見せてやるよ、クソ女ああ！」

『体は剣で出来ている

血潮は鉄で、心は硝子。

幾たびの戦場を越えて不敗。

ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない。

彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う。

故に、生涯に意味はなく。

その体は、きつと剣で出来ていた。』

『無限の剣製！』  
アッシュ・ミレット・ブレイド・ワークス

歯車に囲まれ無数の剣の刺さっている場所になる。

コイツ、力はあるが戦闘経験は0だな。センスも欠片もねえ。

ソル、ルナをリロードする。この銃は改造をして、実弾と魔力弾を同時に打てる。さらにルナの方は、魔力を針状にして相手に悟られないようにできる。

ある程度相手に蓄積出来れば、体内爆発だって可能だ。

「死ねえええ！」

20を越える剣を飛ばしてくる。ソルで撃ち落としながら、ルナで密かに針弾を当てる。

「壊れた幻想！」  
フローケンファンタズム

凌ぎ切れなかった剣が目前で魔力となり爆発する。  
チツ。少し背中をかすつちまったな。だがコイツの腐った思考の中  
にはキティも居た。ここで殺さないと！

「喰らえ！サンダガ！！」

文字どおり光速でアイツに向かうが、盾のように剣を出し、

「壊れた幻想！」

魔力爆発で相殺する。

「FF系の能力なのか？地味に強えなあ。」

「お前のはアーチャーとシロウだろ？もつと被らない様な奴考えな  
かったのか？しかも容姿がギルとか、せめて能力と合わせろよ。」

「強いんだしいいだろ！？」

同時に剣が迫る。すぐにヘイストを使い避けながら近づき後ろを取  
り、ソルで弾幕を張り、隙間を縫って、確実にルナの針弾を当てて  
いく。

「弾幕！？ならば打ち消す間でだ！エスク…カリバーー！！」

「なあ！？ぐあああああああ！」

避けると思い油断していた俺はモロに喰らうが、

「ファイガ！そしてエアロ！」

苦し紛れに撃ったファイガの周りに風を作り、2m位まで大きくし

加速させる。

「速いつ！よけれ…ぐああああ！」

アイツは避けきれず右腕が吹き飛ぶ。

「ぐ、あああ！う、腕、俺の腕があああ！殺す！殺す殺す殺す殺す  
テヤルウウウ！」

「けっ！腕一本切れた位で我を忘れるとは。やっぱり雑魚だな。」

まあ転生直後だし一般人同然か。昔なら見逃してたが、キティを守ると決めた今、コイツを逃がすわけにはいかねえ！

「アアアアアアアア！」

アイツは狂ったよう（実際狂ってるが）に剣を乱射してくる。さがりながら避けるが、小太刀が爪先に刺さる。

「クツ！ヤベ「壊れた幻想ウ！」があああ！畜生！」

小太刀が爆発し足が吹き飛ぶ！

やべえ、回復するだけの魔力がねえ！

たまらず体が倒れる。とっさに煙玉を放ち視界を邪魔する。そして最後の魔力を振り絞り針弾を当てる。

よし！後は集中できれば！アイツの馬鹿さに期待しよう。

「ったく、逃げ回りやがつて！だがもう死ね。お前みたいな女、嫌いじゃねーから、遺言は聞いてやる。」

アンタが馬鹿で助かったぜ。

話している内に直死で見た死の点に俺の魔力を集め

「ハア…俺は…女…じゃねえよ。」

「ああ！おまえ、男だったのか？わりいわりい。」

「遺言つか助言だ。「あ？」相手が死にそうでも、油断はするなよ。雑魚の証だ」

「なんだと！？貴様！」

怒鳴りを無視して俺は…

「チエツクメイトだ。」

——指を鳴らし魔力を爆発させた

「汚ねえ花火だったか？」

やべえなー。今の状態キティが見たら絶対心配かけるだろうなあ。

今の俺、体中火傷と掠り傷だらけで、右足とか膝下ねえもん。

——レイン！

あれ、なんかキティの音がする。幻聴とかやべえなあ。

「レインー！」

「よお、キティじゃねえか。こんな所でなにしてんだ？」

「それはこっちの台詞だ！！その傷はどうしたんだ！？なぜ再生しない！？」

「ゴホッ！あー、魔力使いきっちゃまってなー…気にすんな、自業自得ってや、ゴボッゴホ！」

喋る度に口から血が飛び散る。そしてそんな俺を血など気にせず抱

き起こす。

「無傷で帰ってこいといったではないか、馬鹿者！！血を流しすぎだ！止血する。ちょっとまて。」

そういつてキティは泣きそうになりながら、かつてお気に入りと言っていた服を破っていく。

「おいおいキティ。その服気に入ってたんじゃないのか？」  
「怪我人は黙ってる……。」

もう涙声だ。

「なあキティ……。」

「なんだ。レイン。」

「泣いてんのか？」

「馬鹿者！誰のせいだと思ってるんだ！」

ああ。守ると決めたのに、泣かせちゃったなあ。どんどん意識が落ちていく

「なあ……キティ……。」

「なんだ。」

「絶対守るから。なにがあっても、キティは守ってやると誓う。」

「そうか……。」

キティはそっけなく返す。そして落ちていく意識の中、顔を真っ赤にして、優しく微笑んでるキティが見えた気がした……。

あの後俺が目を覚めたのは2週間後だった。

始めキティは泣いて抱きつこうと思ったら、待つてたのはありがてえ説教タイムだった。  
まあ苦にはならねえし、それだけのことをした自覚はあったので甘んじて受けた。

キティは俺からあまり離れなくなったので、よくチャチャゼロに冷やかされた。それに「オレマダ一度セリフガタダケジャネエカ!」とか。最後についてはよく分らん。

そして俺は、鍛錬を増やした。

キティを守ると言った以上、あんなことないようにしないと。

俺達は残り少ない日常を楽しんでいた。

—————大戦は近い……………。

**五話 襲撃！そして新たな誓い（後書き）**

と言うわけで今回は、初の転生者戦でした。

ラストは巧く書けた自信がありません。いちやラブならできそうなのですが…。

それでは皆様、また会う日まで、お元気で。

六話 平和な日々、介入の準備（前書き）

新年明けましておめでとございます。  
今年もどうぞ宜しくお願いします。

六話投稿です。

文字数増えない…。

## 六話 平和な日々、介入の準備

あの転生者との戦闘から俺は魔力操作に力を入れていた。

魔力操作といっても効率的な魔力の使い方だけではなく、魔力弾をアクセルシユーターの様に操作するためだ。

リリなの でなのはが簡単にやっていたが実際やると難しい。そのため俺はデバイスを作ることにした。あれは魔力制御を補助しているらしいからだ。

「どうだ、レイン。そのデバイスと言うやつは。確か機械で魔力を制御する、だったか？」

「ああ。その認識でかまわない。あとは人格プログラムを入れれば完成だ。」

「そうか。それよりお前、最近家に隠ってただろ。」

「まあ、4日ほど研究室でてないからな」

「そのノノノ町に行かないか？ノノノノ」

「デートの誘いか？なら、俺が断るわけないだろ？着替えるから少し待ってて。」

「わかった。早くしろよ。」

「わかってるよ、キティ。」

軽く額にキスして頭を撫でてやる。目を細めて甘えてくるから、マジかわい。

最近はつき合っているという訳ではないのだが、もう恋人同然の様になっている。街で聞かれても否定しないほどに。

俺としては構わないけどな、恥ずかしがるキティも可愛いし。

俺は普段着に着替え、外で待つキティの元に向かう。因みに研究中は基本白衣だ。

外に出るときは認識障害を使ってるが、この容姿だと女にしか見えないので男と認識するように設定している。

「で、キティ。どこへ行くんだ？旧世界に魔導具とかは売っていない？」

「それぐらい知っているっ！散歩だ、散歩。帰りに喫茶店にでも寄るっ。」

「えー、喫茶店だけで良くない？わざわざ歩かんでもバイクもあるしさ〜」

「あんな物乗れるかつ！しかもお前、ハンドル握るとキャラ変わって爆走しだすじゃないか！！」

キティがあんな物と言っているのは俺が改造した奴だ。小型ロケットブースターを搭載し、ミスリルでできた装甲を纏って、その他諸々改造している、文字道理モンスターマシンだ。……一応バイクだ。Gに耐えれば900km出るけど……。そのほかにも漫画に近づける様に色々作っている。

「……ところ変わって喫茶店。一組の男女が優雅に紅茶を啜っていた。」

「そういえばキティ、魔法世界で近いうちに大戦が起きるともっぱらの噂だぞ？それでだが「見に行きたいとか言わんよな？」なぜ分かったし……。」

「お前が真面目な話するときはそんなのばっかだよ……。行くなどは言わんが、行くなら私も連れてけ。それなら構わん。………なんだ鳩がロケットランチャー食らったような顔して。」

「いや鳩死んじゃうだろっ！それっ！鳩リアクションとれたの!？」

「やかましいぞ、レイン。他の客の迷惑になるだろ。」

「いや、振った本人が言うなよ……。………まあいいや。キティの事だからもつと渋ると思っただよ。それに元々キティを置いてい

くつもりなんて毛頭ないよ。」

「戦場に私を連れていく気だったのか？このか弱い私を。」

「じゃあどうしろと！？もういいや、取り合えず『紅き翼』に接触しに行こうか。面白くなる予感がする。」

まあ、予感と言うか原作知識なんだけどな。つか600年位経ってるから曖昧なんだが、何とかなるだろ、アイツ等リアルチート軍団だし…。となると俺も対策しなくてはな。戦え！とか絶対言われるだろなあ……主にナギとラカンに。

「紅き翼か、ネーミングセンスないな、ソイツ等。」

「そう言うなよキティ。きつとアイツ等なりに考えたんだ。ところでキティ。俺はすぐにも行きたいがアイツ等もかなりのチートらしいからな、新しい魔法を試してみたいから、一度森に戻るぞ。」

「そこまで必要か？レインはチートというかバグだろ？妖力とかいう力もあるし、万が一にも負けるとは思えないが…。」

「何言ってるんだよキティ。そんな面白いことがあるんだ、遊ばずにはいられないじゃないか。」

ふふふ、からかえるようにネタ技練習しないとな。戦争、つまり対多になる。アーティファクトも使うか……。

キティを見ると嫌そうな顔してるが、あれは笑ってるな。

「戦争だというのに楽しむとは……。相変わらず陽気な奴だな、レインは。」

くくく、と声を殺してキティは笑う。

「まあ、不謹慎ではあるが……悪くないだろ？」

「くくく、違うない。辛気くさいのは私たちには合わんしな。」

「さあ、帰ろうか、キティ。」

会計をし俺達は森に帰った。

――町外れの森

「キティ、俺は修行だがお前はどつする？多分、2、3時間しか掛からんが。」

「では風呂でも浴びておく。戦争の真つ直中にいくのだろう？暫く入れそうにないのでな。」

まあ家はあるもお湯はどうにもならんからな。

「じゃあ居間でくつろいでいて。終わったら行く。」

「じゃあ頑張れよ。レイン。」

おう、と返して俺は練習に入る。戦争だろ？楽できる魔法があるといいな。

………そうだ！『言霊』とかよくね？あれなら動かさず戦えるな。

呼吸を整え、そう。音じゃなく言葉に魔力を……。

おれは目の前の木に向けて

『浮け』

すると木は浮き上がった。

『上空へ時速100km。飛べ。』

すると木は言葉通りに飛び上がる

『落下。着地直前で停止。潰れる。』

木は落ち始め、着地直前で止まり、いきなり握りつぶされるかのよう  
に圧縮された。

「す、すげえ。少し集中しないと駄目だけどもめっちゃ強いぞ。」

これはもういいな。あ！さっき行く前に作ったデバイスの初期設定  
しないと。すっかり忘れてたぜ。

バリアジャケット  
BJは気分で変えられるようにして。まず起動しよう。

『初期設定をします。マスター名とデバイス名を決めてください。』  
「マスターは俺、レイン・マクダウエル。デバイス名はDesire。  
デザイアはどうだ。願望通りの姿になってくれるからだ。その  
ままだがどうだ？」

『マスター、レイン・マクダウエル。デバイス名称、Desire。  
……………登録完了。初期BJを設定してください。』

別に何時でも変えられるからな……。どうせならこれも前世からのネタ  
を……。

俺はMHP2ndで見た、シルバーソルを思い浮かべ、

「デザイア、セットアップ。」

すると俺は赤黒い魔力光に包まれる。

なんというか……赤黒いって……。

魔力光が消えるとモンハンでおなじみシルバーソルシリーズを着て

いる俺がいた。

邪魔なのでヘルムは腰に掛けておく。

「かつこいいい！さすがだよ、デザイナー！」

『恐縮です。マスター、よろしければ武器の形を決めていただきたい。』

武器ねえ……。モンハンつながりで実用的な武器にしよう。となると防具はレウスだから。

頭に思い浮かべると魔力が形を作る。大きさは俺より数センチ小さい。真ん中で幅広くなっていて、峰は白く、歯は薄い緑が縫い合わせたように付いている。

「……リオレイアの大剣、ジークリンデだ。神に貰った大剣はどうしたって？鍛え始めたら力に耐えられなくなって、文字通りお蔵入りしたよ。」

「今度閃光玉とかつくつとこ。反応みたいしこのまま帰るか。」

俺はヘルムを被りジークリンデを背中に掛けて、家へ向かう。

帰ったあとキティにあつたら、驚きのあまり泣かせてしまいOHANASHIされたのは言うまでもない。

こうして俺達は原作ブレイクの旅に出た。

だが心はまだ何かを求めていた。

## 六話 平和な日々、介入の準備（後書き）

というわけで今回は戦争介入の準備です。

本文では忘れてましたが、初の転生者戦からなにか戦っています。

チャチャゼロは何処へ？王の財宝の中ですwww

レインと二人きりになりたいためキティはあまり出しません。

次回は紅き翼とのお話です。

それでは皆様、また会う日までお元気で。

七話 紅き翼が現れた！(前書き)

七話投稿です。

まあタイトル通りです

後書きにおまけと質問あります。よかったら見てください

## 七話 紅き翼が現れた！

「やってきたぜ！俺イングレートブリッジ上空1000mバージョン・ステルス！！」

『なにを言っているんだ、レイン。早く参戦しろ。』

さっき言ったように下は戦場、グレートブリッジ奪還戦だ。

『これより降下、及びステルス解除を行う為通信を切断する。オーバー』

『了解。心して掛かれ。オーバー』

キティはお留守番。安全のためだ、過保護かもしれないが譲れん。姿を見せ降りながら、ジークリンデを構える。

「貴様っ！何者だ！？」

帝国？連合？んなこと知るか。なんか今俺…

「最高にハイってやつだ！アハハハハハハハハ！」

ジークリンデを一回転させる。それだけで何人かが二つになる。剣が小せえなああ！

「デザイアアア！サイズモードオオオ！」

『了解。サイズモード、展開。』

振り切った瞬間にジークリンデは3mをも越える白銀の鎌に姿を変えた。

「ヒヤハハハハ！いいねえ！一番しつくり来るよ！」

白銀の鎌は振る毎に紅く染まる。

やべえなあー。俺ってば、破壊衝動なくすの頼まなかったからなあ。仮にも俺は吸血鬼だ。破壊衝動 殺人欲 はあるが我慢していたからな。

「いくぜえ！耐えられるのなら耐えてみやがれ！『環伐』（わぎり）！」

・hackからの自分を中心に円陣を描くように伐る技だ。

衝撃波がでたのか、半径4mほどには下半身と上半身がバラバラに転がっている。

「こ、この化け物めえ！！！」

数人が恐れに負け突っ込んで来る。

「大正解〜。ご褒美に左右に裂いてあげる〜」

「や、やめー！ー」

最後まで言わせず縦に伐る。

周りにはもう数十人しかいない。

「最後だあ！『環伐乱絶閃』！！！」

悪魔の爪を錯覚する回転伐り。一人残らず息絶える。

ふう、とため息をつきヘルムを脱ぎ髪を払う。長髪ってめんどろだな。

「で、出てきたらどうだ？そのみなさん。」

一瞬のみ殺気を当てる。  
するとやはり紅き翼だった。

————ナギside

俺はナギ・スプリングフィールド。今はグレートブリッジに来ている。

「千の雷！！っとこれでここは終わったな。」

「ナギ！ついてこい。」

「どうしたんだ、詠春。」

「気配を隠して来いよ。…見てみる。」

完全に気配を隠して柱から見る。

俺は見とれてしまった。そこでは銀の全身鎧を来て白銀の鎌を笑いながら振り回してる奴がいた。

銀色が返り血で紅く染まっても、美しかった。

それは綺麗で、ただ狂っていた。

「す、すげえなあおい。戦ってみたいぜ。」

隣で詠春と師匠は呆れて俺を見てたが、すげえたかいたい。  
そしたらアルが、

「敵としたら厄介ですね。まあ軍関係なくやってますから、敵対行動をとらなければいいでしょう。」

と、いつていた。

「どつやら、終わったようじゃな。」

視線を戻すと、被っていたのをとった。中もまた美しい銀髪だった。

「いい女じゃねえか。性格はお断りだがな。」

とかラカンがいつていた。すると一瞬、恐ろしいほどの殺気を感じた。驚き見てみると

「で、出てきたらどうだい？そのみなさん。」

気配、隠してたよなあ。俺達。

俺は冷や汗を流していた。

レイン side

「紅き翼だな？」

そう問いかけるとアルが出てきた。

「ええ、私はアルビレオ・イマ、と申します。失礼ですがあなたは？」

おお、俺としたことが忘れてたぜ。

「ああ、すまない。俺の名前はレイン・マクダウエルだ。聞いたこ

とあるやつも居ると思うがな。」

そういうとゼクトが警戒を強めた。アルはマクダウエルに聞き覚えがあるようだ。

「マクダウエル、『闇の福音』!？」

「……つな!?(ん?)」「」「」

ナギ絶対分かってないな。

「ということは、貴方は『狂美の銃騎士』、『狂冷の主従』、ですか?」

「ご名答だよ、紅き翼。で、何の様なんだ?約二人なんか闘志燃やしてるけど。」

まあナギとラカンだな。暑苦しい奴だな。え?俺は違っのかった?俺は一对多専門だよ。バトルジャンキーじゃねえ。

「レインだっけ?俺はナギ・スプリングフィールドだ。戦ってくれ!!!」

「こら!ナギ!」

「ハハハハハハ!愉快的奴だなあ。いいぜ、手も足も出ないと思うがな。あとレインでいいぜ。」

「後悔すんなよ?レイン、お前から来ていいぜ?」

ははは、威勢のいい奴だ。

「んじゃ、遠慮なく。『動くな』」

魔力の乗った言葉を言う。さあ、どつくる?つごかせんがな。

「なに言つて…っ！体がうごかねえ！」

「頭冷やして来な。『時速300kmで上空1000mまで。後に自然落下。直前で停止。高速キリモミ回転。』」

言葉通りに動く。俺とラカンが腹を抱えて笑つてる。詠春、ゼクト、アルは俺のことが分かったのか、同情の目でナギを見るが、肩が震えてる。

我慢しなくてもいいのに…。

「クハハハハ！…ふう。『停止』あゝあ。笑わせてもらったぜ？つて気絶してやがる。チツ！」

この時紅き翼は心一つにして思った。

《コイツドSだ！》と……。

「で、何の用なんだ？喧嘩売りに来たなら買ってやるぜ？」

「いやいや。聞きたいことがあるんですよ。貴方は私の敵ですか？」

「敵になつてほしいのか？暇だからかまわんがな。」

「お前、強いし俺達の仲間になんねえか？俺は吸血鬼で賞金首だぜ？」んなこと関係ねえよ。」

ふうん。予想はしてたが面白いなあ。少しだけ関わってやるか。（ここまで0.1秒）

「嫌。（ここまで0.2秒）」

「はやいなあ！おい！」

「まあ、協力関係位ならかまわんぞ？あとナギ、お前の復活の早さのが驚きだよ。他のラカン以外が呆れてるぞ。」

ほれ、詠春とか悟っちまったような眼してるぞ。ゼクトは…諦めか？

んなこと考えてたらアルが前に出てきた。コイツ交渉巧そうな感じするしな。

「エヴァンジェリンさんについて教えてくれませんか？ちなみに個人的なお願いです。」

ま、まさかコイツ、キティの魅力に気付いたのか！？

（駄目だこのロリコン。早く何とかしないと。by作者）  
ロリコンじゃねえ！

「身長が145cm位でな、偉そうにしてるけど、甘えん坊、頭撫でてやると顔赤くしながらもこう擦り寄ってくるんだよ！それがもうかわいいいったらなくて、抱きしめたくなるんだよ。お陰で我慢するのが大変で。」

あれ？周りの人なんか引いてる。まあ気にしないでアルをみると俺はすぐに行動を起こした！

「ガシッ！」

「「同土よ！！」」

「「「なんで!?!」」」

「今度会った時にでも語り合いませんか？僕の事はアルと呼んでください、レインさん。」

「もちろんじゃないか、同土アル。この通信機を使えば俺と連絡が取れる。戦闘も、雑魚を殺す位なら手伝おう。」

そういつて道具袋から予備の通信機を渡す。

「これは、助かります。なんせ五人じゃ限界がありますので。」

「構わんよ、また語り合おう。同土アル。」

「ええ、また今度。」

お？他のメンバー静かだと思えば、orz状態じゃないか。アルはホクホク顔だが。

俺はそのまま上空に上がり消えていく。下でアルがなんか一線距離置かれてるようだが、まあいいか。

————マクダウエル家

帰るとキティはベットでなんか悶えていた。…まさか聞いてた？

「どうしたんだ？キティ。」

「なっ、なんでもないぞ！気にするな！／／／／／／／／／／」

あゝやっぱり聞いてたな。そうだな、待ってばかりもあれだしな。告白、ねえ。そのまま言うのもアレだしなあ。からかってやるとするか。

「キティ、紅き翼とは友人関係になっておいたので、報告する。」

「そうか…、わかった。ありがとう。」

「ところでキティ、……あの会話、聞いてただろ？」

「なっ！なんのことだ？」

「そうか、なら念のためもう一回言っただろうか？」

「いや！いい。レインのことだ、しっかりやったんだろ？気にするな。」

初めはかなり慌ててたキティもさすが天才。すぐに理由を持ってきた。

回りくどいのも駄目だ。直球勝負だな。  
「……夜だ! ……といいな

ちなみに俺とキティはベット並べてるから、一緒も同然だ。

「なあ、キティ。言いたいことがあるんだけど。」

紅茶のカップを置き、こちらを向きキティは、何だ? と答えた。

俺はキティの横にイスを動かし座り直し、キティの目を見ながら……

「…愛している。」

「……え?」

「恥ずいんだ。これ以上言わんぞ。」

静かに体ごと向き直り、瞳を見つめ、また言う。心を込め

「俺は、キティを、愛している。」

キティは目を見開き、そして、ボロボロと大粒の涙を溢れさした。  
そして、抱きついてきた。

「どうして泣いている?」

「ひぐ…嬉しいの。あのね……私も…昔から貴方を……好きだった  
から……」

「俺も嬉しいよ、キティ。」

顎を持ち上げ、口づけをする。キティも慣れてないのだろう、押し  
つけるような乱暴なキスだが、俺の心は満たされていた。

唇を離す。唾液が伝う。そんな事も気にならない。

「ホントはキティに言わせたかったんだけどね。我慢できなかった。」

イタズラっぽく笑いながら言う。キティは恥ずかしそうに俯こうとするが手で止める。

そのままキスをする。今度は唇の隙間から舌を割り込ませ、口内を犯してやる。

ピチャ、ピチャと部屋には唾液の混ざる音だけが響く。

ぷはっ、と唇を離すと俺はキティをベットに押し倒した。

「レイン……いいよ?」

俺達の夜は激しく過ぎて行った…。

そういえばキティの口調が昔に戻ってたな…

(感動が台無しであるby作者)

## 七話 紅き翼が現れた！（後書き）

――おまけ

そっぴいなぜ聞かれたんだ？

「デザイア、わかるか？」

『エヴァンジェリン殿は私を通してリアルタイムで見られてました。』

「お前かつ！！！！！」

――――END

やってしまった。だが後悔はしていない！な今話です。

アルとは勘違いがあります。アルはロリコン仲間、レインはキティの魅力がわかる人。という認識です。まああまり変わらない気がします。

大戦終わらせたら fate かりりなの（無印 & amp; A s - ）に  
一時期跳ばされたいと思います。

作者はあまり漫画に詳しくないのでこのくらいでしょうか。

今のところりりなのに心が傾いてますが、意見お願いします。

八話 短編集・レインの日常 (前書き)

今回は短編集です。

大戦の流れを整理しているので、繋ぎですね。スルーしてくれてもかまいません

## 八話 短編集・レインの日常

~~~~~とある訓練風景

今日はチャチャゼロとの訓練だ。頼み込まれやっているが、俺としては氣の練習になるからありがたい。

まあチャチャゼロをよく壊しちまうから加減はしている。しているとも！だがな、エフエクトのデカイ攻撃は男のロマンなんだ！ついメテオとかやつちまうんだよ！

つと、取り乱した。今回の目標は氣で物理的に炎をだすことだ。フエニックスとかよくね？え、廚二？それが男だ！

「レイン、準備ハイイカ？オレハ出番ガスクナインダ！ココデ活躍シテヤルゼ！ケケケケケツ！」

うわあメタ発言やめろよ。つて早くないか！？

「ちよつ！まだ返事してねえぞ！？」

「ケケケ。ンナノマツテタラマケチマウヨ。」

突っ込んでくるチャチャゼロの後ろに縮地で行く。さあ行くぜ！

「燃えるおおお！！！」

「ナツ！ソレハセコクナイカ！？」

燃えるイメージをして氣を体に纏う。すると体は強化され、さらに火に包まれた。あれ？結構俺も暑い！

「ハーハツハツハー！これなら戦いやすいぜ！どうだ！チャチャゼ

口!！」

大人げないけど、勝つぜ!あれ?チャチャゼロ笑ってやがる。

「ケケケケケツ!オレヲナメスギダゼ?コノ体ハ耐火製ダ!」

「な!なんだと!?!この能力意味ねえ!ええい!効くか、きかんかなどもう無視だ!炎の翼あああ!」

かけ声?適當さつ! 取りあえず炎が効かないというなら!

「速さでせめるぜええ!」

「ナメルナアア!」

このあとレインは勝てたが、チャチャゼロは半壊、庭は全焼したとこをキティに見つかり、説教& amp・氣と魔力なしで庭を直すという罰を受けたとさ。

めでたし、めでたし

~~~~~キティのいない平日

今日はキティが買い物に行って半日いない。実は王の財宝には生前の部屋がそのままはいつていた。キティにはいつていない!なぜなら、

この中にはギャルゲーが大量に積まれてるからさ!電気は魔力とかで何とかなるから、キティの留守を見つけては進めてきたのだ!

「今回は、ついに呉の登場人物がそろったのだ!さあて、好感度あ

げなくてはな。ストーリーも面白いから、ここまで行くのに何カ月  
かかったことか！」

~~~~~3時間後

「ついに！ 権との《自主規制》タイムだぜ！まず飯すませとくか。」

「

.....キティside

————ガチャ

「今帰ったぞ〜。…む？レインはどこだ？」

旨い果物をもらってきたんだが…。自室か？

————ガチャ

「レイン、旨い果物をもらって来たんだが……っ！」

落ち着け私。目の前にあるものはなんだ？パソコンだ。そのぐらいは知っている。写っているのは？桃髪の女と黒髪の男が絡み合っている。ということとは？エロいゲーム。

「~~~~~!?レイイイン!!!!!!」

————レインside

ふう、軽く済ませたしゲームの続きだな。

「レイイイーン!!」

ツ!?キ、キティだと!?しかも俺の部屋から?

まさか、バレた!?半日って言うてたじゃんっ!ゲームつけっぱだよ!?

予想通り俺の部屋にはどす黒いオーラを纏ったキティがいた。

「や、やあキティ。随分早いじゃないか。どうかしたのか?」

「ああ。服屋が休みだったのな。それよりレイン、遺言は?」

「ちよ、ちよつと待てキティ!言い訳をさせてくれ!いきなり遺言はないだろっ!?な?」

「まあ、聞いてやろう。」

よかった!まだ望みはあるっ!ここで巧くいいくるめれば!

「これはな。ストーリーがいいんだよ!だから俺はソツチ目的じゃなくてな!」

「つまりやってたんだな?なるほど、遺言すらもいらないとみた。」

しまったあああああ!!

「ちよ!待てっ!は、速まるんじゃない!」

「問答無用!死ねええええええ!!リク・ラク・ラ・ラク・ライラック!契約に従い我に従え氷の女王。来れ、とこしえの闇!えいえんのひょうが!」

「それはねええだろおおお!」

パソコン狙いやがった！だめええ！

「全ての命ある者に等しき死を！其れは安らぎ也。おわるせかい！」

「あああああああ！俺の分身がああああ！」

ちくせう。ここまでしなくていいじゃないか！

「さて、次はお前だな。レイン。」

「え！？もういいじゃん！パソコン死んじやったよ！？」

「それとこれとは話が別だああああ！！」

「ぎゃあああああああああああああああああ！」

こうしてレインの数少ない楽しみの一つが消えた。

そのあと二週間はキティに無視され続けたという…。

八話 短編集・レインの日常（後書き）

というわけでギャグ回でした。

レインを陰で活躍させるか、『マギステル・マギ』にするか。正直迷いますね。学園での展開に関わりますからねえ。

それでは皆さん、また会う日まで、お元気で。

九話 王女と狩りと娯楽（前書き）

九話投稿です。

タイトルの通りですね。

目を開けたのは申し訳ない。受験が近いのです。

九話 王女と狩りと娯楽

あれからアルから何度か殲滅依頼がきたんだが、毎回俺の性格が殺人鬼になっている。どうしてか気になりナギ達と模擬戦をしてもらったんだが、何時ものままだった。(苛めたくなるのは元々だ)やはり殲滅戦だけらしい。

でもって今日は「合わせたい人が居る」らしい。なんだろう、重要イベントってことは覚えてるんだがなあ。

あゝなんか苛々するう！これも全部ゼクトのせいだ。とりあえず殴つとこ。

ーガシツ！ガアン！！

「い、いきなりなにをするんじゃ！」

「足を土魔法で掴んで動き封じて頭の上に金だらい転移した。」

「そういう事を言ってるのではない！」

シヨタ爺がなんかいつている。歳には勝てないということか…。

「誰がシヨタ爺じゃ！」

「え！？シヨタ爺、心を読めるのか！？なんて恐ろしいシヨタだ！」

「口にてとつたわ！……まったく、お主と話すと疲れるわ。………」

主に精神が。」

ちなみにガトウとは仲が良い。なんでだろ。詠春とゼクトはからかい易いし、ナギとラカンにはバカだし。なんかガトウはからかう気が起きない。タカミチ君は二次創作定番の告白された。会って2日目だし、一目惚れらしい。

からかわなかつたか？からかおうと思つたさ！だけど断つた瞬間涙

目で見てきやがって。罪悪感沸いてきたぞ……。
それからなんか優しくしてしまう。柄じゃねえけど。

「でさあ。結局だれがくるんだ？」

「ああ、それはな……。」

なんとというかジャストタイミングでおっさんが来た。
ああ、思い出した！ならいまくるのはフェイクだな。

「マクギル元老院議員！！」

「いやわしではない。主賓はこちらの御方だ。」

で、くるのは勿論あの方。

「ウエスペルタティア王国、アリカ女王じゃ。」

「ウエスペルタティア王国女王アリカ・アナルティア・エンテオフ
オシユアじゃ。」

なげえ〜名前なげえ〜。ナギの奴は……見とれてやがるな。主人公
の親となると一目惚れで好感度70%くらいで始まつてる気がする。
あ、なんかラカンと口喧嘩始めた。速く去りてえ。

「その銀髪の者、名は？」

おおう。姫様からの有り難い名乗る権利だ。……ありがたくねえ。
少し堂々といってやるう。

「俺の名前はレイン・マクダウエルだ。なにか用か？アリカ姫。」
「なっ！？あの賞金首がなぜ此処に居る！？」

なんか臨戦態勢とつてる。自分が会う人も知らないのかよ！

「呼ばれたから来てやったんだよ。……本当はキティとイチャイチャしたかったのに……（ボソ）」

「ははは……申し訳無い。アリカ様。レインは紅き翼の協力者なんです。」

ガトウがフオーローしてくれる。それより帰りたい。あと30分位したらキティが起きる時間なんだが……。因みにキティの起きる時間は適当だ。昨日はやり過ぎたからな。まだいけると思う。

なにをやり過ぎたかって？人生ゲームだよ！変なこと想像したやつ表でろ。殴り飛ばしてやろう。

「それで、ガトウ。もう帰ってもかまわんか？キティに朝食を作つてやらねばいけないんだ。」

「ああ、手間を取らせてすまないね、レイン。エヴァさんにも毎回借りて済まないと言っておいてくれ。」

律儀だよなあ。紳士だよガトウは。見たことない女性にも気を使えるんだから。

「気にするなよ。お前には世話になっている。また今度飲みにもいこうや。」

「ははは、君の奢りなら喜んで行かせてもらおうよ。」

「これでも俺は金持ちだぜ？任せときな、最高なものを用意させてもらおうよ。」

「こらっ！無視するでないっ。『白銀の死神』！」

「はあ？なんだ、その名前は。」

「レイン、君はいつも銀の鎧に銀髪、白銀の鎌でしかも軍を一人で皆殺ししてるだろ？君の二つ名だ。ふさわしいと思うけどな。」

『白銀の死神』…。痛いっ！痛すぎるぞ！誰だ、こんな二つ名つけた奴は！

「ああ、レインは目立つのが嫌いなようでしたので、私が付けました。ふふふ、どうですか？」

貴様がアルウウツッ！しかも確信犯だろ！なんだよ最後の笑いは！
？…落ち着け俺。確実に使える脅しを…。

「……もうかわいい幼子見つけても紹介してやんねえぞ。（ボソ）
「すみませんでしたあ！！」

うわぁ〜プライドとかないのか、こいつは。見て見る。周りの奴等かなり引いてるぞ。

アリカ姫とか顔が引きつってるなあ。

「カッコいいじゃないか、レイン。なにが不満なんだ？」

「ナギ：お前は自分で言ったやつだし目立つの好きだろうけどな、俺は目立ちたくないんだよ。しかも紅き翼と一緒に居るとバレたら正義バカ共になに言われるか…。」

まったく。千の呪文の男だろ？5・6個しかつかえん癖になあ。

「んじゃ、アリカ姫、ガトウ、タカミチ君、また会おう。」

「はい！レインさんもお元気で！」

「そなたもよろしくたのむぞ。」

タカミチ君、元気だね。アホにならないで、純粋なままでいてほしいね。

アリカ姫、なぜあなたによろしくしなきゃならんのだ。

ガトウ、アホ共は放置して構わん。
口に出さずそんなことを思いながら、キティの朝食を作るため、急いで帰るレインだった。

~~~~~マクダウエル家

俺はキティとティータイム。

「レイン、今日はどうする?」

「ああ、もうそろそろ金がなくなりそうだから、なんか依頼をやるうと思ってる。」

ワインとか高いんだよ、寝る前によく飲んでるからな。

「そうか。暇だから今回は私も行くぞ。さあ!依頼受けにいくぞ!」

「はいはい。なんか気合い入ってるな、キティ。」

~~~~~時間経って森の中

俺はレウスシリーズ、キティはレイアシリーズをまとっている。キティの防具は非人格のデバイスを使っている。

「デザイア、ジークリンデを頼む。」

『了解しました。モード・ジークリンデ。』

キティは断罪の剣だ。

「なあ、レイン。なんで鎧なんて使っただ？火竜の番なんて一瞬じゃないか。」

そう。今回の依頼は、森に住み着いた火竜の夫婦だ。てかり才夫婦まんまだったからモン　ンな装備だ。

「これは形から入るんだよ、俺は。それより、魔法は身体強化だけだ。わかつたな？」

「わかつている。まあ娯楽だと思ってやるか。レイン帰ったら”アレ”開けてくれよ？」

「じゃあねえな。一月ぶりだし、良いのを開けてやるよ。……お、向こうから来てくれたぜ。」

二つの影が近づく。片方は緑、片方は赤。

「キティ、緑の方は任せたぞ。赤は任せろ。」

各々がペイントボールを投げつける。するとこちらを向いて

「クエストスタートだ！」

~~~~~40分後

そこには、傷だらけで息絶えてる火竜と、所々傷の付いた鎧姿のレインがいた。

「へっ、さすが空の王者と言っただけあるな。」

体当たりとかブレスは常人なら一撃で死んでしまうだろうな。

『お疲れさまです、マスター。さすがですね、通常は二時間近くかかるらしいですよ。』

「ありがとう、デザイア。おまえのサポートのあってこそだよ。」

『恐縮です。マスター、エヴァ嬢はよろしいのですか？』

「ああ。今から見に行くよ。」

見るとキティはもう終わっていた。

「よお、キティ。久々の戦いはどうだった？」

「レインか。なかなかいいものだな。だが魔法の研究の方が私は好きだな。」

「そうか、闇の魔法、知ってても使えないしな。今度紅き翼の手伝いくるか？」

「それもいいな。だがまずは、飯が喰いたい。それに、食後が楽しみだ。」

キティはそれから上機嫌に報酬を受け取り、帰宅した。俺も楽しみだ。

~~~~~  
食後

「レイン、頼むぞ。」

「わかってる。えっと…たしかここらへんに…」

王の財宝を物色する。そしてワインの瓶をとりだす。コルクを取ると独特の香りが広がる。

それをワイングラスに注ぐ。キティはすぐさまのんでる。もっと上品にしてほしい。

「ほう、これはうまいな。誰のなんだ？」

「十代の処女の血だ。なかなかうまいだろ？しかも魔法使いの血だからな、魔力も多い。」

まあ隠す必要もなかったがな。って誰に言ってるんだ？

「さて、今日は疲れたし俺はねるぞ。」

「ああ、今行く。」

キティはそういってネグリジエになりベットに入ってくる。

「おやすみ、キティ。」

「ーチユ、と軽く唇を重ねる。」

「おやすみ、レイン。」

あゝ原作には関わりたいたいけどキティは安全に暮らさせてあげたいしどうしよう。

そんなことを思いながら、忙しい一日は終わった。

九話 王女と狩りと娯楽（後書き）

と言っわけで今回は原作の王女との出会いです。

前書き通り受験近いので、4日はかかるかな。もしかしたらもっと…

大戦の展開は早いと思います。作者が詳しくないからです。これまた申し訳ない。戦闘描写？苦手です。
できる限りがんばりますのでよろしく。

それでは皆様、また会う日まで、お元気で。

設定 主人公と今後方針（前書き）

はい、また本編とは別です。

設定 主人公と今後方針

主人公：Rain^{レイン} McDowell^{マクダウエル}

《ステータス》

筋力 EX+

魔力 EX

耐久 A

幸運 A

敏捷 EX

宝具 A

『マドイクルウカネ』レンジ1〜1000対軍宝具
…鐘の音を聞いたものに超リアルな幻覚を見せる。

《スキル》

限界突破 EX…筋力、魔力 などのあらゆる限界を無視できる。

直死の魔眼 …対象の「死」を視覚情報として捉えることが可能。
情報はモノの死にやすい部分を線、「死」そのものを点と現す。死
の線は強度等がなく厳密にはモノの寿命を現している。

魔術知識 EX: 平行世界の魔法、魔術に類する知識。
平行世界の魔法 EX: 平行世界の魔法を無条件で行使できる。ただし個人のアビリティを使用することはできない。

《詳細》

性格は基本乱暴だがキティのみには紳士的対応をとっている。正義を掲げたり自分の考えを押し付ける人は嫌い。

戦闘中稀にテンションがおかしくなるが、戦闘能力は大幅に上昇するため、それを制御できないか試行錯誤している。

基本キティ至上主義で自分よりキティを優先するのでかなり溺愛している。

戦闘は楽しむ主義なので殲滅魔法や広域に効くアイテムは使用しない。がキティに危害が加わると切れ、広域を死なない程度に焼くなど残虐な性格もある。

原作には関わりますが原作ブレイクなどには興味ないが、面白そうなので関わっている。

女顔なのは自覚しているので言われても落ち込むが大して気にならない。というかそれを利用することすらある。

好きなもの: キティ、殲滅、血

嫌いなもの: 正義馬鹿、甘いもの、KY

レイン「というわけで俺のステータスだ。」

零「まだまだ強化する気です。」

レイン「おい、作者。血を飲んだ後はもっと強いぞ。」

零「そうだね。でも今回は基本ステータスだからこんなものだよ。」

レイン「そうか。でさ確か別の小説書くんだよな？どついう設定にするんだ？」

零「大戦後まで跳ばしてそつからリリなのいくんだ。友人がリリなの書いてて感化されちまつてな。だけどこつちがメインだから更新ペースは変える気ないよ。」

レイン「同時進行で挫折する人多いけど大丈夫か？」零「大丈夫だ。問題ない。それより怖いのは飽きだね。それとリリなものにはエヴァちゃんも連れてくよ。」

レイン「んなの当然じゃないか。」

零「さあ。文字も稼いだしこれで終わりだ。」
レイン「それじゃあ次話で会おう」

「以上、主人公と今後の方針でした！」

設定 主人公と今後方針（後書き）

またしても外伝ですみません。

ですがご安心を、このステータスは十分くらいでかきましたので、本編はほぼ完成しておりますので一日、二日まっってください。

それでは皆様、また会う日まで、お元気で。

十話 誘拐と嘘っぱち（前書き）

借り 貸し

へと修正しました。ご指摘は有り難いですよね。
更新でなくて申し訳ない。

十話 誘拐と嘘っぱち

「アリカ様がさらわれた？それでなんで俺が呼ばれるんだ？」

「場所の特定が出来たから警備とかの陽動を頼みたいんだよ。出来るかい？」

それってテオドラも拐われたよな。テオドラには会ってないな。一度は逢うつもりだったから丁度いいか。

「そこの兵士は殺して構わんだろ？」

「ああ此方が邪魔されずに出来ればいいからね。」

「俺のアーティファクト使えば一瞬で無力化出来るぞ。だから救出に俺も連れてけ。」

王家へのツテはなかなか作れんからな。ここで仲良くしておけば後が楽だな。

「それならいいけど…どんなアーティファクトなんだい？」

「お楽しみだ。作戦決行は？」

「明日だよ。今ナギの言う通りと直ぐでることになるからね。明日教えるんだす」

「確かにあの馬鹿に教えたら問答無用で壊滅させてくるだろうな。」

「そう言うことです。私の用事は以上ですがアルとゼクトがあなたを探してましたよ。」

まあ大方魔法のことだろうな。嘘説明も考えてあるし、それで凌ぐしかないかな。

「分かった。帰りに寄ってくよ。」

「それじゃあ、僕はここらで帰らせて貰うよ。」
「おう、また明日。」

そう言っただけでガトウは帰った。んじゃ俺はアルとゼクトに会いに行くか。

そうして俺はアルの魔力の近くに転移した。

「ようアル。なんか用があるのか？」

「ああ、あなたですか。ええ、でも予想はついてるんでしょう？」

やっぱりこいつのことだな。まあこればかりは誤魔化しようがないな。

「こいつのことだろ？ デザイア、挨拶しろ。」

「はじめて、アルビレオ様。私はマスターの高性能インテリジェントデバイス、デザイアと申します。」

「これはご丁寧に。それでレイン。単刀直入に聞きますけどデバイスとは何ですか。」

「デバイスってのはな、魔法、又魔力の操作を科学的にサポートする機械の総称だ。」

「魔力を科学的に…ですか？」

「ああ。俺の親父は研究が趣味らしくてな、俺の城の図書館に魔導書やらなんやらが大量にあるんだ。」

嘘っぱちだ。でも神に貰ったんだったら精神異常者扱いだからなあ。現物見せる気ないし。

「成る程。それをもとに貴方が創ったと？」

「そういうことだ。アル、気になるなら試作品ならあるぞ。どうす

る？」

「一つあげとけば大人しくなるだろ。アルからゼクトに言ってもらえるし。」

「お前にとつて有り難い機能もあるぞ。」

「私の有り難がる機能ですか？」

「ああ、念話で一声かければ超高画質静止画、動画を取ることができ。因みに俺はキティの寝顔とかを保存している。」

「是非とも欲しいです。流石レインですね。私の欲しいものが分かっている。」

ふっちょロいな。

俺は王の財宝から紫のイヤリングを取り出す。因みに俺のデバイスはダイヤモンドのネックレスだ。魔力光通り点滅は赤黒い。

俺はデバイスを投げ渡す。

「それは支援デバイスだから攻撃魔法は向かないぜ。名前はクレイ、男性人格なのは文句受け付けないぜ。」

『よろしくたのむ、ご主人。』

「ええよろしくお願いします。話は変わりますが明日のことは聞きましたか？」

「ああ。聞いたよ。まかしとけ、姫さん達には指一本触れさせねえよ。じゃあ俺は帰るぜ。ゼクトによろしく。」

「ありがとうございます。」

俺そのまま家に転移する。キティは寝ていた。

「ただいま。」

「…おかえり。」

なんだ、起きてるじゃないか。機嫌が悪いようだけど。

「どうしたんだキティ？」

「勝手に行くな……。心配するじゃないか……。」

「ゴメン。疲れてると思って……。」

「自分を抱いた相手が朝いないのは流石に寂しい……。」

女性には失礼すぎたな。以後気を付けなければな。

「すまない。明日の事が終われば暫くは休めるから。」

「紅き翼か？」

「ああ。姫さんたちが誘拐されたらしい。王家に貸しを作る機会はなかなかないからな。」

「分かった……。」

流石にこれはキツいな。キティが無口になるとは参ってる証拠だし。

「今日は可愛がってやるよ。」

「んっ……。」

こつして俺達の変わりない夜は過ぎていく。

十話 誘拐と嘘っぱち（後書き）

受験シーズンです！作者も受験です。辛うじてほぼ3なので本気に
ならなくてははいけませんね。

次回は姫様救出です！

レインのアーティファクトついに解禁！？

十一話 侵入？いやなんか違う…（前書き）

すみません遅れました。

ではどうぞ。

十一話 侵入？いやなんか違う…

何時も通り眼を覚ますとキティがいた。暫く頭を撫で和んで居たがそろそろ朝食を作るため起きる。

「ふああ。今日は確か夜の迷宮に姫さんを取り返しに行くんだっけ。」

出発は夜だから暫くはキティと過ごせるな。それに久々のアーティファクトだ。どんな幻覚を見せてやるうか。ククククク…。

~~~~~ 出発の夜

「気を付けるよ、相手は組織なんだ。真祖だから死なないとはいえ不意打ちは堪えるぞ」

「分かっているよ。俺を誰だと思ってるんだ？それに騎士とも言われてるんだ。お前より先に死んでたまるか」

「分かっているなら良いんだノノノノ」

「じゃあ行つてきます。」「ああ、行つてらっしゃい」

チユ、と軽くキス。

いや、いつまで経ってもコレは幸せだな。

~~~~~ 夜の迷宮前

俺が着いた頃にはもう揃っていた。馬鹿なナギすらも来てるとは。まあいいや。

「悪い、遅れた。」

「全くだ。どうせまあイチヤイチヤしてたんだろ？」

「確かに合ってるが何か言葉に棘があるな。」

「レイン、ナギは一刻もはやく助けに行きたいんですよ。ましてや惚れた女性ですからね。」

アルはニヤニヤしながら俺に説明してくれた。なるほど、良いことを聞いたな。

「なあ！？ちげえよ！ただ遅れてきたことを……」

「ナギ、皆まで言うな。皆分かっているから。」

「ほっ本当か？」

うむ、まず希望を与える為に一同にアイコンタクトをとる。アルは気付いた。ようで、よりニヤニヤして頷く。その他の面子は呆れながらも乗ってくれるようで頷く。

「そうだよな。俺達仲間だもんな！」

ナギは安心したように笑う。しかしそれでは俺が詰まらん。

「ああ分かっているさ……」

「お前は惚れた女（アリカ姫）は死んでも守る男だと！」

アルと俺が声を揃えて言う

「分かってねえじゃねえかバカヤロー!!!」

殴りかかって来るが顔面にカウンターを打ち込んでやる。
のたうち回ってるナギにフォローも忘れない。

「ナギ、良く考えろ。それは男として素晴らしい事だぞ?」

「そっちじゃねえよ!俺は別にあんな女に惚れちゃいねえ!」

ありや無理か。まあいいや、ナギだし。

「おいレイン、ナギ。何時までふざけてる。」

「詠春、お前は真面目だな。だがそれでは俺が詰まらんじゃないか。
まあ戯言はここまでにしてアルよろしく」

「それで皆さん、作戦を確認しますよ。周りの兵士は全てレインが
殺ってくれます。なので私達は真っ直ぐ突き進みますよ。」

いきなり真剣な顔になってアルは言う。

「レイン、1人で大丈夫か?」

「心配するな詠春。今俺の本気を見せてやる。アデアット。」

すると手にはハンドベルが現れる。

「それがお前のアーティファクトか?弱そうだが。」

「確かにコレは武器と言う訳じゃない。まあ見てろ」

拡声の魔法を使いハンドベルを鳴らす。

「惑い狂え。」

カラン、カラン

「なんだこの音は？おい！お前どうした？なっ！？うわあああ！」

「や、やめる！ぐあああ！」

「なんなんだ！？来るな！来るなああ！」

兵士達はもう壊滅状態だった。精神に干渉して幻覚を見せてるので報告なんていう考えすら出てこないだろ。

その様子を紅き翼は呆然と眺めていた。

「おいレイン。お前がやつのか？」

「ああ。今兵士達は味方がゾンビになって襲われてる夢をみてるだろ。クククク…。なかなか面白いアーティファクトだろ？」

ニヒルに笑って言うがアルさえも若干引いてる。

「お前等早く行けよ。俺は後からついていく。ちょっとばかし用があるから。」

「おう！レイン、ありがとなっ！」

口々に礼を言っていく。やがて姿が見えなくなったので行動を始める。

「さあて、何年ぶりの収穫だ？不死だから取り置きは大事だし。」

そう呟いて近くに居た若い女の兵士の首を刈る。血が大量に出てくるので赤色のボトルにいれる。

ちなみに赤は女、青は男だ。一人一瓶なので血液型はあとで分ける。

「200程詰めてくかな。」

それから俺はゆっくりと発狂している兵の血を集めていき200程詰め終わる頃には殆どが死んでる。白目で泡吹いてるからキモイ。

「やはり人間は脆いな…。」

とにかくナギ達を追いかけようか。

~~~~~夜の迷宮・深部

俺はヘイストを使って分かりやすく壊れている道に行く。するとナギ達が居たので声をかける

「よお！」

「レインか、なにをしてきたんだ？」

「俺が吸血鬼なのを忘れてないか？」

「あゝそうだったっけ。」

やっぱり馬鹿だな。

「まあいいや。ハッ！」

——ガアアアン

ラカンが壁に気を当ててブチ抜く。

おいおい、アイツ、姫の事考えてないのか？

「よう…来たぜ、姫さん」

「遅いぞ我が騎士。」

あーはいはい。こっちは無視の方向で。  
とりあえず横で小さくなってる人に話しかける。

「アンタはヘラスの第三皇女様で間違いないな？」

「確かにそうだがお主は誰じゃ？」

さすがに見た目じゃ分からんかな。

「失礼。俺の名前はレイン。一時的に紅き翼に協力している。まあ他には『白銀の死神』とか言われてる。」

途端、皇女は顔を真つ青にして、こちらをみってくる。

俺、なにかしたか？

「わ、妾を殺しに来たのか？」

涙目。マジで怖がってやがる。俺、自分から殺したこと…結構あった…。

と、とにかく！こんな幼女におびえられるのは精神的に辛い……。

「んな訳ないだろ。おまえを助けに来たんだよ。」

「ほ、本当か？」

「ああ。てか何でお前を殺すんだ？賞金首されたがあんまり気にならないから。」

「そうか、口調がかなり砕けたようじゃが…」

テオドラが安心したように言葉をもらす。

そりゃこんなガキに何時までも敬語使えるかよ。

「ナギー！イチャついてないで行くぞ！」

「ああ！わかった。」

ナギ達と共に外に出る。後は纏めて潰すだけだ。

「ナギ、ラカン。手を出すなよ。」

「じゃあねえな！」

少し不機嫌なラカンを無視して集中する。施設一つを潰す訳だから幾ら俺でもすぐには無理だ。

「ハア。グラビガア！！」

始めは小さい球体だったが徐々に大きくなって空間を支配していく。10秒経つ頃には施設はもう跡形もない。死体すらも赤い血跡なっている。

「さあ行くぞ！」

「あ、ああ。」

惚けていた奴も戻ってきた。因みにテオドラは俺の服（鎧は着てない）にしがみついて震えていた。

所変わって紅き翼の隠れ家

「何じゃ？これが噂の紅き翼の、秘密基地か？どんな所かと期待して来て見ればただの掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ。このジャリはよお。」

「……っ！？」

「お前等追われてたのっ！？」

「知らなかったのかよっ！」

基本、依頼の時以外は調べないからな。

「テオドラ、不満なら俺が新しいのを用意しようか？ちなみに紅き翼諸君にプレゼントだ。」

するとテオドラが目をキラキラさせて寄ってきた。  
え？なにこの可愛い生物。

「本当か？では頼むぞ。あと妾はテオで構わないのじゃ。」「了解。  
んじゃ危ないから少し離れて。…エアロ！」

基地の側面を風でカットする。事情を知らない馬鹿二名が騒いでいるがこの際無視だ。  
断面の横に王の財宝から家をだす。全て木で作った力作だったがそれも側面をカット。

「うんしょ！つと！ふうこんな物かな。」

押して寄せればいかにも半分を改築したような家が完成した。

「すごいのじゃ！お主どうやったのじゃ？」

「風で斬って収納してあった家を出して気合いでくつつけた。あと俺はレインでいいぞテオ。」

数時間後、寄ってくるテオに解放された俺は帰路についていた。  
さて、この戦争どうなるかな。イレギュラーが出るか出ないか。俺という存在はこの世界に入ったイレギュラー。世界は俺を見逃すか、始末するか、そして俺すらも運命に巻き込むか。

「まあ、戯れ言だな。俺はキティを、家族を守れば知ったことではない。」

それだけを考えとけばいいんだ。

「ただいまあゝキティ。」

「ああ。おかえり、レイン。」

今はこうして出迎えてくれるだけで幸せだな。  
平和とキティと適度な戦闘。

うん、幸せだ。

「もうすぐ最終決戦だ。」

「…そうか」

少し暗くなるので頭を撫でてやる。

「お前が死ぬなとっている内は俺はしなん。安心しろ。」

「…うん！」

ああ。やっぱりしあわせ。

十一話 侵入？いやなんか違う…（後書き）

今回は姫様&テオ救出ですね。

テオは仲間に入れても出番なさそう。

次回はナギ大暴れ！？かも

では皆様、また会う日まで、お元気で。

十二話 最終決戦と真実（笑）（前書き）

一週間以上遅れてしまった…

申し訳ない！！

タイトルの通り真実と言うのはシリアスではありません。

## 十二話 最終決戦と真実（笑）

「不気味な位静かだな、やつらは。」

「嘗めてんだろ？悪の組織なんてそんなもんだ。」

「王道だよな。ってかなんで俺いるんだ？ラスボスなんて聞いてねえぞ？」

会話から分かる奴も居ると思うが俺は墓守り人の宮殿前にいる。珍しくアルが報酬だすって言うから受けたんだが疑うべきだった…。ライフメーカーとかマジないわぁ。

「そうだレイン、アルがお前は雑魚を頼むってさ。親玉はまかせろ！」

少し離れた所でアルがすごい笑顔でみてるのはムカつくが、やった！雑魚で報酬もらえるとはな！喜んでいとセラスが来た。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました！」

もうすぐだな。めんどくせー。この戦いは俺が介入しなくてもいいかと思っただかしょうがないな。

「ナギ殿、」

んあ？ああ、アレか。ナギは有名なんだなあ。あいつの生活したら皆落胆するだろうな。

「サ、サインをお願いできないでしょうか？」

どこからともなく色紙がでてくる。あの鎧のどこに仕舞ってるんだ？俺の今付けているおなじみの防具にはアイテムポーチがついてるんだが、まあいいか。顔まで防具で隠れているから俺の正体はバレない。ありがたいけど少し寂しい。

「タイムリミットか…。」

いつのまにシリアス突入してたんだ！？え？俺が考え込んでいた時？ハッ！誰の声だ？まあいい、そろそろ俺も会話に入ろう。

「ナギ、まず俺がでかいのブチ込んでやるよ。土気あげるのにもいいしな。」

「頼んだぜ！その様子だと取っておきがあるんだろ？」

当然、と自慢げに返し構える。まあようは自然体なんだが…。

「…魔力」

手の上に魔力を集める。球体になるまで一秒くらい。そして周りに浮かばせる。

「…気」

同じ様に球体にして浮かべる。

「…妖力」

吸血鬼だからこそその力、また浮かべる。

「混ぜられ！」

俺の一声で三つの球が一つに混ぜろつとする。

しかし魔力と気でさえ反発するのだ。妖力まで加えて混ぜるはずはない三つの力を無理矢理押さえ込む。

「っ！？暴れんなっ！」

まだ混ぜり切つてはいないが形は固まった。ここに加える力は…

「…神力っ！」

神の使い魔になったことで得た、僅かな神力のさらに少量加える。

「んなっ！？」

突然膨大な力が球体から溢れてきた。

なんだ！？ たったあんだけの神力にこんな力が！？

「おい、レイン！ その物騒な球どうにかしやがれっ！！！」

後ろから焦ったような声でどやされる。

ナギがビビるってどんだけだよっ！

「ええい！と・ん・で・けえええええ！！」

デスボールの様に敵陣に突っ込まれた球は全ての力が爆発して光を  
発した。

ーードゴオオオ！！！！

爆発の余波が微かにきたが…

「なあレイン…」

「いうな。」

「でもなあ。」

「何も言うな。」

「何で外にいた敵、殆ど消えてるんだよ！！」

「今日初めてやった技だから制御できなかったんだよ、悪いか畜生  
おおお！！！！」

俺が攻撃した場所にはデカイクレーターができていた。そこには焼き  
尽くしたのか何もないが、周りは余波で死んだから、手足とかも  
げたりしてまさに地獄絵図、って感じになってた。



「は、白銀の鎌…？。な、なんでこんなところにいつがいるんだよっ！？俺はまだ死にた…」

ーーーーシュッ

男の言葉は続かなかった。いや、男の首はすでに無くなっており、喋ることは永遠と不可能な状態だった。

「おいおい、此処は戦場だぜ？なに言ってるんだよ。」

最近の兵士はなってねえなあ。

「さて、掛かってこいよ。殺してバラして並べて揃えて晒してやるよー！」

ーーーーおおおおおおおおおおお！！！！！！

~~~~~数時間後…

「ふう、鎌以外の武器使おうかな？もつと動かないやつを。」

結構小回り効いていいんだが、でかいからなあ。

『マスターの知識からだど、曲絃系なんてどうですか？汎用性があるので便利ですよ？』

俺の呟きにも真面目に答えてくれるデザイア。さすが優秀だねえ。

「それは後で考えるとして、ナギ達を見に行くかなー。」

戻ってナギを見るとアーウエンクルスに付きまとわれていた。
つてまさかこのタイミングかよっ!?

「ナギツ！避けるっ!！」

「なんだ？つて、うおう!！」

ナギを無理矢理押し退ける。ライフメーカーの攻撃が俺の腕を吹き飛ばし腹を抉られる。アーウエンクルスは死んだようだ。

ラカンはかなりの重傷だ。

「いけません、ナギ！そんな体では…っ!！」

「紅き翼でこれかつ！創造主は規格外かよっ!！」

「んなことはいいんだよ！アル、レイン。俺の傷を治してくれ!！」

できないことはない。だがナギの魔力は原作以上に減っている。俺がいることで世界が変えたのか？

とにかくアルでは傷を癒すことしかできないからな。

「しかしそんな無茶な治療ではっ!！」

「30分も持てば大丈夫だ。レインも頼む!！」

「けどなナギ、魔力が空だろ。それぐらい分かっているはずだ。」

真っ直ぐ眼をみて告げる。するとナギは苦虫を噛んだ様に顔を歪める。

「ああ、分かっている…。けどな！これは俺がやり遂げたいんだ！たのむ！何とかならないか!?」

「アル、まず傷を治してくれ。なんとかしてやるよ。」

たぶん、俺の魔力を渡せばなんとかなるだろうが…。

「助かるぜ、レイン。」

「分かりました…。無茶はしないでくださいね。」

アルはナギの傷を治していく。

「デザイア、魔力の譲渡いけるか？量は大体俺の魔力半分位だな。」

『半分ですかっ!?!…可能ですが、マスターへの負担が大き過ぎますっ!』

魔力を譲渡するというのは簡単なことではない。体内で魔力を譲渡する人と同じに変えなければならぬ。

以前百分の一の魔力をキティに譲渡したときは、丸一日激痛に苦しんだ。

「構わない。これはアイツがやるべきことだ。俺が居ること運命が変わったのなら俺がなんとかするべきだ。」『…分かりました。』

『…魔力変換を開始します。』

デザイアが薄く光ると同時に、俺の体に激痛が走る。

「がああ！ぐうっハア…ハア」

『変換率20%…30…40…50、もう少しです！耐えてください』

い！」

分かっている。そう反応する余裕すらない。

『90…100%！魔力変換完了です。』

よし！あとは渡すだけだ。

「ナギ！今から俺の魔力を渡す。」

「できるのか！？頼むぜ！」

『魔力を凝縮……完了です。魔力体を出します。』

デザイアが紅い飴玉のような物をナギに渡す。

「そいつはおまえの魔力に変換した魔力の塊だ。噛み砕けばいい。」

いわれた通りナギは噛み砕く。すると魔力に包まれた。

「すげえ量だな……」

「当たり前だ。俺の魔力の半分を込めたんだ。」

「ホントにレインはバグだな。」

乾いた笑みではぐらかすと俺は座り込む。

「俺は疲れた。行ってこいナギ。」

正直キツイ。力技で痛みを消しているから長くは持たない。

「ならわしも行こう。傷も大したことはないからな。」

ゼクトも立ち上がる。しかしそれにラカンが抗議する。

「死ぬぞ！アレは今までとは違う！死ににいよいよ行かせてやれ」
レイン……」

「アイツ等が行くしかないんだ。止めれば世界が消えてしぬ、挑んで負けても死ぬ。なら少しでも勝算がある方を選んだほうがいい。」

どちらにしろ、ミスったら死ぬんだそれにな。

「^{アイツ}俺は千の呪文の男だぜ？負けるわけないだろ。」
そして二人は創造主へと向かって行った。
暫くするとアルが口を開いた。

「しかしあなたも規格外ですね。魔力の変換なんてやってのけるなんて。」

「ハハハツ……俺に不可能は……あるなあ。ツアグ？ハア……そろそろ……ハアげんかツグウウ！！」

ヤバい、痛みすら感じねえ。ああ……せめて、最後まで見たかったなあ……

「レインツ！！大丈夫ですか！？」
「だ……じょ……う……に……見え……か？」

ハハハツ、と笑いながら俺は眼を閉じた。
でもやっぱりアルの必死な顔は新鮮だな。

「知らない天井だ…。」

痛みはないが体は倦怠感に包まれている。正直、体をおこしたくもない。

腹の部分に違和感を感じ眼をやると、なぜかキティが寝ていた。見舞いに来てくれたのだろうか。

見ると眼が赤く腫れている。また泣かせちまったみたいだな…。

「ありがとな…キティ。」

優しく頭を撫でてやる。

「ん〜れいん？」

まだ眠いのか目尻に涙を少し溜め手を伸ばすキティ。俺はその手を握ってやる。

「ここにいるよ、キティ。」

答えると一度こちらに顔を向け、眼を見開いた。すこしすると怒った様な嬉しい様な表情をしながら抱きついて来た。

「レイイン！よかった〜！痛いところない？大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。心配かけたな。後、口調。」

昔のしゃべり方に戻っている。

「んんっ！あれだけ無茶はするなと言ったじゃないか！」

それを言われるとなにも言い返せない。かなりの無茶した自覚位あ

るし…。

「それについては済まなかったと思ってる。しかしキティ、どうしてこの場所がわかったんだ？」

俺は行き先を教えてないし、一応隠居してたようなもんだから情報も来るはずないし。

「うむ。愛の力だ。」

愛の力らしい。

「おや？眼が覚めたのですか？」

アルが来た。そしてなんか厄介事の予感が…。

「もうすぐ式典が始まりますよ？どうです、エヴァ嬢と廻ってみては。」

ん？アルにしてはまともだな…。うん、そうさせてもらおう。

「アル、お前は来ないのか？」

「私は上がり性なもので…。」

絶対嘘だな。そう言ってやるとアルは笑いながら去って行った。

「よし、キテ「レイン」起きたらいいな！早く行くぞ、始まつちまう！」えっちよっ！俺けが人だつて！それに用事がっキティイイイ！……！」

俺はそのまま筋肉達磨に連れ去られた。沸いてきた筋肉達磨に驚き
気絶したキティを残して…。

鎧を装備して式典にでている。正体がバレるのはめんどくさいから
な。

「オイ、レイン。こんな時にも鎧か？取ったらどうだ？」

「そうはいかねえよ。紅き翼に賞金首がいたら問題になっちまうだ
ろ？」

相変わらず馬鹿なナギをあしらい観客に手を振ることを忘れない。

「んなことねえって！オラ！取れって！」

「わあ！止めろ、兜取るうとするなあ！」

「……ふあさあ、とナギの手が兜を取る。

「……ざわざわ……ざわざわ……」

あーあ。折角隠してたのに

「かわいい……」

「すてき……」

「きゃあああああ……！」

聞こえてきたのは黄色い悲鳴だけだった。
え？ちよっ！どっ！という事？

「お前の容姿、一般人は殆ど知らないぜ。いつも鎧で顔隠してるだろ?」

「え?じゃあ俺が毎回わざわざ顔隠してた意味は...?」

「ないな。」

「なん...だと...?」

暑苦しい格好までして隠してたのに...無駄...だと?

衝撃の真実を知りレインは式典中真っ白になってたと言う...。

ちなみに帰った後キティにお仕置きされ寝ることが叶わなかったのは言うまでもない...

十二話 最終決戦と真実（笑）（後書き）

というわけで今回は最終決戦と式典での出来事です。

キティと詠春が空気でしたね。小説は難しいです。

次回は時間跳びますよー。何話でネギま！終わるだろうか。

ちなみに次回は外伝の英雄の休暇を経験済みです。そこで追加された能力は出る度にあとがきに載せますので、外伝見なくても大丈夫なように努力します。

では皆様、また会う日まで、お元気で。

十三話 契約と再会と約束（前書き）

投稿です。

端折りすぎ？ごめんなさい！

あの後原作よんでないからよく分かりません。
それを踏まえてどうぞ！

十三話 契約と再会と約束

あれから色々あった。キティに修行つけたり、キティにスクナと戦わせたり、アリカ助けてナギが幸せになったり、休暇とか言われてキティと別世界いつてチートが強化されたりとな。

まあ楽しんださ。原作始まったら麻帆良からあんま出られなくなるからな。

ちなみに今はキティと一緒にいない。なにがあるか分からんから俺が一度姿を眩ませて、手がかりもってるナギを襲わせて、ナギに魔力強化の魔導具使わせて（キティは原作より何倍も強い）なんか呪い掛けとくように言っておいた。

原作通り登校地獄をバカ魔力＋魔導具でかけて麻帆良に放り込んだようだ。

……で、原作一年前。ヘラスでテオの所で遊んでたんだが、ついに来た。麻帆良からの依頼書が……。

「ホントに行くのか？そんな依頼、受けなくても……」

テオが必死にとどめようとしてくれるがこればかりはどうしようもない。

「済まないな。向こうにはキティが居ると言っていたからな。行かないわけにはいかん。」

「じゃ、じゃが、依頼の内容も書かぬような依頼を受けずともエヴァ殿を連れてこればよかるっ？」

そう。手紙には依頼の内容など書いてなかった。『できればすぐに

依頼したい。依頼内容をお話したいので麻帆良まできてほしい。』
纏めればそんなものか。かなりイラツと来るような内容だったが、
この依頼を受けなくては俺の計画が、っていうか、違和感なく麻帆
良に入れない。

「暇なときには会いにくる。それに、三年以上かかる依頼を受ける
つもりはないから安心しろ。」

軽く抱きしめて頭を撫でてやる。テオは親に甘える様に寄ってくる
ので、断ることができない。

俺は将来、親バカになるんだろうなあ、って常々思っよ。

「それじゃな。」

「…うむ。」

いかにも納得していない顔で返事をするテオ。
やれやれ、と心の中でため息をつき転移する。

今の俺の見た目だが身長は170程で、一応仕事なので髪を後ろで
纏め（俗に言うポニーテールだ）ている。

身長は一応18歳で通すつもりだから、神様印の魔導書『これでス
パイは楽々！みんなの肉体変化魔法編！』を使っている。ふざけた
名前だが、神様印に偽りはなく、年齢詐称薬などとは違い文字通り
肉体を変化させているので制限時間などもない。

んで、麻帆良に着いた訳だが、迎えのタカミチが未だに現れない。
11時に待ち合わせたのもう20分オーバーだ。

「すみませんレインさん。遅れてしまいました……」

後ろから声が聞こえた。タカミチのようだ。俺は振り返りながら、

「遅いぞタカミチ、俺は心が広いからいいが他だっ…た…ら」

お互いに固まった。タカミチは俺から目を逸らしながらもチラチラ見ては顔を若干赤くしている。

「タカミチ、お前老けたなあ。前まではあんな小さかったのに…。」

「アハハ…何時の話ですかそれは。それに僕だって傷つきますよ？」

話し方が大人びてるが変わらん。だがな…

「俺は男だ。なぜ顔を赤くしている？是非詳しく聞きたいなあ。タカ・ミ・チ・君！」

「えと！レインさんは成長しないんじゃないかなかったですか？明らかに大きくなってますけど…。」

逃げたな。まあ後々問いつめるとしよう。

「魔法だよ。それより、そろそろ学園長室に連れてってくれ」

「あっはい。ではこちらです。」

《NOW Lording》

「ふおふおふお。よく来たのう。」

学園長室に着いた俺が一番はじめに見たのは妖怪だった。ん？学園長は喰われたか？

「学園長はどこだ！ああ腹の中か。いやその後頭部が妖しいな。少し解体させやがれぬらりひょん！」

「ふお！？俺が学園長じゃぞ！？まだ死んでおらん！」

「嘘をつくなっ！ぬらりひょんがトップの学園など問題にならない方がおかしい！！はっ！まさかそのためのこの強力認識阻害結果か！？なんてやつだ、生徒を人質にするなんて…！」

テンションがあがって本音を言ってしまった。でも事実でもあるから気にしない。

「ひどいっ！さすがの俺でも泣くぞっ！？」

「あの…レインさん、遊んでないでそろそろ話を…」

タカミチが言い終わる前に服装を整えイスに座る。

「依頼の内容を聞きたいんだが…なに暴れてるんだ？」

タカミチと俺が蔑む視線を送る。なぜタカミチも乗ってるかという
と鳥頭とか筋肉達磨をからかっているときに、タカミチも参加させ
調きよ…ゲフンゲフン、教育したんだよ。

「俺が悪いのか？君じゃろ？はじめにバカにしたのは…」

「うるせえよ。早く依頼内容話やがれ」

最後をかぶせる様に、そしてより冷ややかな視線を投げかけながら
話す。

はあ、と学園長はため息をつくと話 시작했다。

「お主にはこの学園の教師をしてもらいたいのじゃ。」
「教師？なんだ、んなことのためにわざわざ俺を呼んだのか？後頭部握り潰すぞゴラアツ！」

怒鳴るがジジイは何でもないようにしている。

これは確かに狸だな。何時利用されるかわからん。

「勿論、教師というのは表向きじゃ。実は此処最近人手不足でのお。マトモなのは高畑君位じゃし、その高畑君も出張が多くて侵入者に対処しきれんのじゃ。」

「つまりは俺に教師兼学園の侵入者討伐に当たってほしい訳だな？」

「うむ。どうじゃ、引き受けてくれんじやろうか。」

俺は余裕で構わないんだが

「条件が幾つかある。その返答によっては引き受けよう。」

これはなくても構わないんだが念の為に先手を打っておかなくてはな。

「できるだけは飲もう。」

「一つ目は教師としての仕事と夜の警邏以外での行動の自由だ。自由と言っても何かあったときはスグ駆けつけよう。」

これはキティと過ごすため。

「二つ目は殺傷の許可。」

「むっ。それは……」

「最後まで聞け。もちろん相手が俺や学校の生徒に対して、敵対行

動を起こした者に限る。理由は見せしめにもなるし、身内に潜っていた場合の対策だな。それにたまたま俺のところに暗殺者やら復習者も来ることがあるのでな。」

これが通れば薬味をフルボッコできる口実になる。

「確かにのう。うむ。許可しよう。」

「三つ目は俺の個人情報に絶対にもらすな。学園内ではレイン・アルカードとして行動する。英雄は嫌いなんだ、俺は。」

これで、正義バカを食い止めれる。薬味とかも来そうだし。

「その程度ならば吞もう。」

あとは

「最後は、俺が使う弾丸代と出張の場合の特別手当だ。まあこれは当然だよな。必要経費って奴だ。」

「う、うむ、なんとかしよう。それだけかね？」

「この先イレギュラーな事態があればその時毎に言いに来る。今はこれくらいだな。」

「ではよろしく頼むぞ。君は非公式だから他の魔法使いに対処できない敵のみ頼む。因みに部屋は女子寮管理室じゃからな。ふおふおふお、期待しておるぞい。」

なっ！？今更言うのか？やっぱコイツ信用できねえー！！

趣味は人をからかう事とアニメ、マンガ。
好きなのは可愛い馬鹿
嫌いなのは責任を擦り付ける人」

ちなみに薬味の事だ。

「へえースリーサイズは？」

「あのかな…なに勘違いしてるか知らんが俺は男だぞ？」

『ええええええええええっ！？おとこお！？』

シンク口率高すぎだろ…。

そこで出てくる報道部。

そんなにネタに飢えてるのか？目がヤバい位光ってるぞ？

「じゃあじゃあ、この中で好きなタイプは？」

「そうだな、キテ…エヴァンジェリンさんと、龍宮さんと長谷川さんかな。」

キヤー、と黄色い悲鳴が上がる。

「特徴に統一がないけど何か基準はあるの？」

「ようはタイプを聞いているのか？なら秘密だ。」

原作で気に入ったとは言えない…。

それとキティ。おまえ以外の名前言ったからって殺気を強めないでくれ。少し息苦しいぞ。

「ではレインさんには数学を担当してもらおう事になるから、みんな仲良くしてくれ。ではHRを終わる。気を付けて帰ってくれ。」

『さようならー！！！』

と答え俺の方を向くが、そこには一枚の紙があり、

『未熟者めがつ！』

と書いてあり、みんなが悔しがっていた。

しかしこの時いくつかのフラグを立ててしまったのをレインは知らない。

速攻で職員室に戻ると新田先生に声を掛けられた。

「レイン先生、2-Aどうでしたか？」

「あ、新田先生。元気があるクラスですよ。成績を見るに育てがいのあるクラスですよ。」

「やはりレイン先生もそう思いますか。最近の教師はあそこじゃないかとよかった、なんて言いますが、いやー、貴方が担任でよかったですよ。」

「いやいや、私なんて……。でも教師として貴方は尊敬しますよ。生徒から聞きましたよ？自ら憎まれ役になるなんて、中々できる事ではありませんよ。」

「ハハハハハ、教師は生徒を導くためなら鬼にもならないといけないんですよ。」

くくく30分後

「では新田先生、また明日。」

「ええ、おやすみなさい、レイン先生。」

軽く別れを告げ、寮にもどる。

いやー、新田先生はホントに人格者だなあ。つい話込んでしまった。

自室なう

寝るために自室の部屋の扉を開けるとキティがいた。

やべえ、忘れてた…。

「やあ、キティ久しぶりだな。」

できるだけいつも通り声を掛ける。

本音を言つと今すぐにでも抱きつきたいが自重しなければ。

「ほ、ホントにレインなんだな？」

「ああ。」

答えるとキティの顔が歪み、赤くなった目からは止めどなく涙があふれ出す。

そしておもいつきり抱きついてきた。

「よがっただあー！ひぐっずっと、寂しかったんだ…！えぐっ、探しても、みつからなくて…。それで、あいづなら…じってるって、おもっで…。そしたら呪い掛けられちゃって…」

「すまない…。」

「うわああああああああああん！よかった！よかったよお
おお！！」

それから小一時間キティは泣き続けた。

ああー。計画の為とはいえやり過ぎちまったなあ。

「それでレイン、あの間、何をしてどこに居たんだ？」

「え？？」

「え？？ではない！おまえは何をやっていたんだ、と聞いているんだ！！」

やばいつ！ヤバいぞ俺っ！！原作がはじまるし念のためとは言えないっ！

今まで見たいにごまかすか？かなり成功確率が低いがこれしかないのか！？

「…お前はいつもそうだ。私の知らない所で一人で何かをしている。傷だらけで帰ってきてても、いつもはぐらかす。どれだけ私が心配してると思ってるんだ…。…そんなに私は頼りないか？信用ならないか？」

「っ！？違っっ！キティのことは頼りにしてるし、信用しているっ！」

「ではどうして何も言ってくれない！私ならなんとかなるなどと傲慢な事は言わない！だけど…心配なんだ…！お前が私の知らない所でなにかあったらっ！…それが…怖いんだ…。」

俯き、体を震わしながら俺の胸板を叩く。

その力にいつもの力強さはなく、酷く弱々しかった。

「……………済まない。そうだよな、分かった。だがキティ、そのときは無茶はするな。真祖といえど簡単に殺されるぞ。不死殺しなんてだれしも持っている様な所だからな」

言ってしまった…。天界に連れていけるか？いやアイツに頼めば行けるだろうけどな。脅して危険とか言っちゃったしーっ！

「うむ。そのときはレインが守ってくれるだろう？」

「ハッ！当然だ。」

「ふふふ」

久しぶりに見た目相応の笑顔を見た。その笑顔には愛情、優しさ、信頼、信用が入り交じっていて、俺の頬も自然と緩んだ。

「オーイ！俺モイルゼ！ナニワライアツテンダ！無視スルンジャネエ！ー！」

「お前居たんだ」

「チキシヨー！ー！」

十三話 契約と再会と約束（後書き）

と言う訳で今回はタイトル通りですね。

薬味がくる前にステータスマとめて見たいです。

それと丸ごとギャグパートが一度もないので乗せたいです

それでは皆様、また会う日まで、お元気で。

十四話 薬味が来るまで…（前書き）

投稿です。

字数が多くなって自分でも驚きです。

ではご覧ください

十四話 薬味が来るまで…

やっかいな約束をしてしまっただけから十日。キティはあのあと帰宅した。茶々丸を撒いてきていたようなので、学園の奴ら（茶々丸含む）には俺達に面識があることを黙っていて貰うことにした。はじめは不満を言っていたがまあ大丈夫だろ。

「勝負するアル！」

「勝負するでござる！」

「しねえよ！いい加減諦めてくれ！」

あれ以来クーと楓に付きまとわれている。瞬動を使ったのが悪かったのだろうか。バトルジャンキーに目を付けられるとは運がないなあ。

「一回戦ってくれたら諦めるアル。だから勝負ある！」

「それ俺が諦めてんじゃん！？誰が捕まるかつ！」

「待つアルー！！！」

全力で逃走。森に逃げ込んだが、

「桜咲、龍宮、何の用だ。」

「やれやれ、気配は消してたんだけどね。」

「貴様は何者だ！？」

後ろの木から二人が現れた。

桜咲は敵意丸だしたが、龍宮は恐らく気づいてるだろう。敵意と言っより好奇心で付いてきたような感じかな？

「はあ…何者って…。お前のクラスのしががない担任の先生じゃないか。」

「お嬢様を狙うか！？斬岩剣！！」

意味不明だが本人は至極真面目な様で襲いかかってくる。俺はとつさに剣の軌道上の体を霧に変えて無効化する。

「手ごたえがない？貴様なにをした！？」

「私も気になるな。是非ともタネを教えて貰いたいな。」

不意討ちが効かない事に困惑する桜咲に、興味深そうに観察してくる龍宮。

俺が吸血鬼と言うのは知らなかったのか？英雄としての『レイン』しか知らない様だ。

「攻撃したな？」

ゾクツと二人の背筋に悪寒が走る。

「ならば正当防衛だ。」

言い終わると同時に彼女達の影から闇を伸ばして手足と首、頭を闇で固定する。

因みに桜咲は痛み付きだ。

「ぐっ！や、やめろおア、アアアアアア！！」

「刹那っ！なにををするっ！あなたがそんなことしたら問題になるぞ！」

神経に直接くる痛みに気絶すらできず悲鳴を上げる。それを見た刹那

那は冗談では済まないと思ひ必死に抗議する。

「ああ、俺には殺傷許可がでてるから問題ない。」

「なっ！？そんなことあるはずがっ！」

「勿論条件付きだ。『相手が明確な敵意を持って攻撃してきた場合』
つてのが条件なんだが、今はどうだろう？」

加虐的な笑みを龍宮にむける。

龍宮は自分の状況に気づいたのか唇を噛みしめている。

「なーんてな。」

そう言い俺は拘束を解く。

元より殺す気など更々ない演技だ。しかし、今の刹那には必要だっ
ただろう。

拘束を解かれた二人は地面に倒れ込む。

「なんの…つもりかな？」

「フッフ、演技だよ、演技。俺が一度殺されそうになった位で自分
の生徒を殺す訳がないじゃないか。まあ痛みは本当だけど。」

さすがにあそこまで支離滅裂な事をするとは思ってなかった。

「ケアルガ。」

二人の体が緑の光に覆われ、傷を癒す。

目を覚ました刹那は俺を親の仇が如く睨んでくる。

「演技だと？」

「ああ。桜咲。お前は近衛木乃香の護衛なんだろう？今のままでと、戦わなくてもいい奴まで敵に回すぞ。それに近衛の近くに付いていなくていいのか？」

「わっ、私はお嬢様の護衛だ。必要以上近づく必要は……」

後半はもごもご言っているが迷っているようだな。

「刹那、それについては正直レイン先生に賛成だ。」

真名も気づいていた様だな。

「真名まで！？しかし私は……っ！」

「今はまあそれでいいだろう。正直俺は帰りたいし、交友の証に情報をやろう。」

「情報だと？」

「デザイン、封鎖結界、展開。」

『了解です、マスター！。封鎖結界を展開します。』

世界の色が変わる。

完全に隔離された世界へと。

「……ここは？」

「この結界は完全に隔離されているからな。鬱陶しい監視もない。」

「こんな事までして、どんな情報ですか？」

関心している龍宮を余所に桜咲が急かしてくる。

「近衛近右衛門の言葉を鵜呑みにするな、寧ろすべてを疑って掛か

れ。」
「「っ!？」」

桜咲だけでなく龍宮も反応する。まあ今までは信用していたんだな。

「それはどうしてですか？彼は一番信用できるはず…」

一見冷静に見えるが明らかに動揺している。

無理もない。今まで一番頼りにしていた人が、要注意人物扱いされたのだ。

「さらに詳しくいえば、彼は近衛に魔法を教えるシナリオを考えている。」

「馬鹿なっ！長は一切教えてはならないと…」

「だから、もし、偶然に近衛にバレてしまったら？誰にも責任はない。つまり彼の計画はそのためのものだ。」

「証拠は…あるんですか？」

「ない。だがお前等が三年になったとき、計画は動くだろう。それと龍宮を入れたのは依頼があつてな。」

「興味深い話だったよ。内容によれば受けるよ。勿論、報酬はもらう。私は高いよ？」

悪戯っぽい笑いを浮かべていう龍宮。

桜咲はフリーズしている。

「内容は、学園のスパイ、あの狸に何か言われたらコチラに流してくれ。あとはクラスの護衛だ。ほかの人に何を言われようと魔法をばらすな。期間は卒業まで、報酬は仕事のあるなし関係なく100万、何かあった場合は弾代+200万だ。」

ヒュー、と口笛を吹きやがて了解と口にした。

「それじゃ、俺は帰るよ」

用事は済んだので帰路に着こうとするが振り向いた瞬間後ろから手首を掴まれる。

あれ？ここは格好よく立ち去れるところじゃね？

「ど、どうかしたのか？龍宮。」

「真名で構わないよ。それで、刹那には情報を上げて私にはないのかい？すっごく怖かったんだけどなあ。」

涙目になる龍宮、いや真名。

演技だよな、と思い立ち去ろうとするがガシツと掴んで離してくれない。

「はあ、わかったよ。桜咲、お前も来るか？」

「私ですか？悪いですよ、レイン先生。」

「先生なんて堅苦しいのは教室で十分だ。なに悩んでるか知らんが、そんないかにも悩んでますって顔で帰るのか？」

桜咲の表情は堅い。

「悩んでるなら、何かをやれ。時間を置いたら、答えに近づくかもしれん。」

俺の言葉を聞いた桜咲は何か考えるような素振りをして、すぐに微笑んだ。

「そう…ですね。今度、人生相談に乗ってください。そしたら今日

のことは許してあげます。」

「ハハハハッ！あれは自業自得じゃねえか。俺は此でも教師だから人生相談ならいつでも乗るよ。んじゃ、奢ってやるから食いにくいぞ！」

財布から二十枚の諭吉さんが消えても後悔はしていない。

ある日曜日、今日は麻帆良主催の祭り、いや…戦争だあ！！

麻帆良の技術力は世界一といっても過言じゃない。そこで作られたゲームはかなり進化している。以前一つ買ってみたが、映像、グラフィック、背景は常に動き続け、3Dのエロゲーなんて物もある。

そんな街で行われる即売会には万を越える人が集まっていた。告知なんてないんだぜ？

開始を待っていると長谷川を見つけた。

「よう、長谷川じゃねえか。お前もこの戦争に参加するのか？」

声をかけるとゲツ、とかなり失礼な反応をして作り笑いをして答えた。

「レイン先生…。こんな所でどうしたんですか？」

「もちろん、参加するためだ。最近娯楽に飢えてるんだよ。麻帆良は異常な位技術が発展してるから、外から来た俺に取っては興奮が押さえられないぜ。」

「（今、異常って言ったか？いやそんなはずは…）そ、そうなんで

すか。」

正直出品作品を全部買いたい所だぜ！あ、そうだ！

「なあ、長谷川、頼みがあるんだが…」

「（厄介事だろ絶対…）な、なんですか？」

俺は懐から札束を取り出して渡しながら

「お前が買う奴と時間空いてたら片っ端から買ってきてくれないか？」

「ささささ札束っ！？えっ？多すぎだろ絶対っ！？あ、やべ」

地が此なのか？まあ敬語に違和感あったんだが、そう言う事か。

「そっちが地か。学校じゃないんだしそっちの方がいいんじゃないか？あと余った金はやるよ。」

「余るって、半分もつかわねえよ！？」

背を向け手をひらひらさせながら立ち去る。そして念話で、

『お前、生粋の突っ込み役だな』

「お前のせいだろおがあああああっ！！」

ハッハッハ、からかいやすいなあ。ゾクゾクするよ…。

微かに顔が歪む。

異常なことには関わりたくないようだ。

「あいつを見て始めどうおもった？」

「どうって別に……」

「素直に答える。」

「……ロボットがあそこまで人に近いなんてありえねえって……」

「うん、普通の人はその思うだろうね。しかし長谷川、お前の周りはどうだい？」

「……それが当たり前だろって言ってる。」

認識障害が効かない。それは魔法使いに人生を滅茶苦茶にされたよ
うな者だ。学園長も恐らく分かっているあのクラスにいたんだろ。

まったく反吐がでるな。

「じゃあ長谷川、おまえ魔 少女リ カルな はって知ってるか？」

「知っているけど、それがどうかしたのか？」

「あれは魔法じゃないよな？ いわば超科学だ。ならば製作方法さえ
知ってれば……」

懐からデザイアをだす。

「挨拶だ、デザイア。」

『初めまして、長谷川千雨殿。マスターのインテリジェントデザイ
ア、デザイアと申します。』

「デバイスっ！？……マジかよ。ぜってえありえねえよ。これは……そ
うっ！夢だ、夢なんだよなっ！？」

軽く現実逃避を始めた。

「まあ聞け。もちろんこんなことはバレちゃいけない。だから認識障害がこの学園に張ってある。だから普通は、外部からしたら異常なことでも中では普通と認識”させられる”」

「……させられる……。」

忌々しそうに復唱する。うつむいて顔は見えないが恐らく顔は怒りで満ちているであろう。

声は低く、いつもの長谷川からは考えつかない。

「なんだよ…それっ！人の心をいじってるってことかよっ!?!」

珍しいくらいの常識人だ。

この学園では天然記念物じゃないか？

「ああ、許せない。反吐がでるよ。だからお前には選択させてやる。安全に、この事を忘れ異常を正常と感じれるようになるか、苦痛を乗り越え、死地へ赴き、この学園の馬鹿共より強くなって見返してやるか！さあ選べ！人生最大の分かれ道だ！」

テンションが上がってしまい畳み掛けるように問いかける。

「わ、私は……。」

「なに、時間はある。七日待とうそれまでに……。」

「いや、もう決まってる。」

ほう、もう覚悟が固まったか。

いきなりだったから迷うかと思ったが…。

「レイン先生、私を鍛えてください！」

「いいのか？こちらは漫画のような生易しい世界ではない。いつ殺されるか分からん様な世界だぞ？」

「何かあつたら先生が守ってくれるんだろ？」

悪戯っぽく笑う長谷川いや千雨。

全く、またベタな台詞をいう。

「当然だ！立派な魔砲つかいにしてやるっ！…ちうたん」

「今魔法の字違わなかったか！？それに私がちうつてしてたのかよ！この偽リインがっ！」

「なっ！アインと一緒にするなっ！胸はないし背も高いわっ！」

「なんでそんな親しげなんだよ！」

「実際に親しいからだっ！」

ハッ！リリなのの世界の事いっちゃまった。

「…え、マジ？お前まさか平行世界移動できたり…」

「…いや、俺はできん。アリス…あ、知り合いの神な？そいつに連れられ百年ほど…」

「まさかの師匠が規格外…。じゃあさっきの魔砲って聴き間違いや…」

「ないぞ。」

「お前はかの魔王を越えられるくらいにしてやる！」

「いやあああああああ！」

十四話 薬味が来るまで…（後書き）

というわけで今回はタイトル通りでしたね。

刹那がアホな子？大丈夫です。次回には直ってるはず…

千雨は好きなキャラなので軽くチート化です。

真名と刹那、木乃香もチート予定。

誤字脱字評価、常時受け付けてますよ。

では皆様、また会える日まで、お元気で。

十五話 毎回サブタイ考えるのはキツイ(前書き)

二週間位開けちゃいました。

申し訳ない。

いいわけは後書きで、今回は修行

十五話 毎回サブタイ考えるのはキツイ

「レイン先生、修行じゃなかったんですか？」

「ああ、丁度いい場所があるのでな。つとここだ」

ついたのはキティの家。もちろん別荘を借りるためだ。

「ここ、マクダウエルの家じゃん。ってまさかアイツものなのか？」

「ああ。家族兼妻だ。」

「はあ！？結婚してたのか！？あいつ何歳だよ」

「いや、籍はいれてないぞ。どうせ戸籍が偽造だしな。年は俺が800であいつは700だ。」

千雨はもう呆れているようで、あまり驚かなかった。

「つまらん！せつかく黙ってたんだが・・・」

「もう人間じゃねえだろ・・・」

「ああ。吸血鬼だしな。ふはは、リリなのせかいで1000年ほど休暇も取っていたしな」

「まじか・・・もう何言われても驚く気しねえよ」

はあ、と大きなため息をつく。

それを無視して俺は扉をあける。

「む、レインか。いいところに来た。今日茶々丸がメンテナンスだからい・・・なぜ長谷川がいるんだ？」

「弟子にする」

胸を張って言う。

するとキティは青筋を作りレインに見事なストレートをきめた

「バカ者があああああ！あいつは一般人だったよな！？なにバラシ
といて弟子だとおお！？私にすら稽古つけなかつたくせにズルイ・
いやとにかく馬鹿者があああああ！！！」

「・・・おい、怒ってるところわるいが気絶してるぞ？」

俺は初めの一発で意識を失い玄関に突っ伏していた。

「うむむむむ。とにかく長谷川！おまえこちらにかかわる覚悟があるのか??」

さっきまでの怒った表情が消え、真剣な表情で千雨の目を見る。

「あ…ああ。ある。」

一瞬たじろぐも千雨も目を見る。

俺はと言つと気絶した俺（偽）を設置して気配なくキティの後ろへ移動する。

「……………」

睨み合っている二人に悟られぬ様に抱きつきキティの耳に息を吹きかける。

「ひゃわあっ！」

「なあに詰まらんことしてんだよ。それより修行っ！久しぶりの玩具…ゲフン弟子がきたんだからよ。」

「ちよつとまで！今玩具つて言つたよな！？まさかそれ本音っ!？」

「ハハハ…。しししし知らないなあ…。聴き間違いじゃないのか？」

「ははははは。」

「分かりやす過ぎんだよっ！おいエヴァンジェリンっ！お前からもなにか言えっ！」

激しい突っ込みをする千雨。

よく疲れないよなあ、と想いながらキティを足に乗せ愛る。

「うみゅ〜」

「なぜだっ！私に味方はいないのかっ!？」

「ケケケケ。コノ家ニ常識ヲモツテルヤツハレイン以外イネエヨ。モツテテモ無視スルケドナ。」

「チャツー!?!?なんなんだよこの家はっ!！」

「お?久しぶりだな、チャチャゼロ。」

「ソウダナ。オマエガ来ルツテコトハヤツト人ヲ斬レルノ力?」

「俺は死神か疫病神かよ…」

「オマエガ行動オコス時ハナニカガアルカラナ。」

うっ！原作知識使ってるからしょうがないじゃないか。

「後で相手してやるよ。俺じゃねえがな。」

「ケケケケ。タノシミニシテルゼ?」

「ああ。千雨!ってうおあっ!！」

千雨は部屋の隅で「ふふふ、夢なんだよこれは。目が覚めたらPCの前に…ふふ、ふふふふふ…」と呪詛の様に呟いてる。

「おいっ！目を覚ませ千雨っ!！」

急いでキティを投げて駆け寄る。「むぐっ!」とか聞こえたが気のせいだろ。

「ふふふ……ハッ！私は一体なにをっ！」

「（記憶がないのか？）転んで頭打ったんだよ。早く訓練行くぞっ
！」

「あ、ああ、ごめん。なんか忘れてる気が……」

「気のせいじゃないか？それより行くぞ。」

千雨を抱えミニチュアヘダツシュ！

「ひゃあ！ちよっ！どこ触ってやがる！！そして何処に走っている
！？壁しかないぞっ！」

「下だ。」

下に魔法陣があるが絨毯にとけ込ませてあるから気づきはしない。

「そこにあるのは床っ！行き方予想ついちまったよー！ハリ　夕風
やめてえ！」

「大丈夫だ。問題ない。」

え？と聞き返すを残しておれたたちの修行が始まったんだなこれが。

さて、修行話は千雨の視点でお送りしよう。

初日……

リゾート地に連れてかれた私は一通り説明を受けた。

私はこれから24日間ここで過ごすらしい。なんでも此処の一日は
外では1時間らしく、24日外ではちょうど一泊したことになる

ということだ。

次に修行時間は八時に起床。九時から始まり、12時に昼食を挟んで六時までと、結構普通。

理由を聞いたところ「確かに時間は少ないが密度はあるから覚悟しろ、たまにキティもくるよっ！」とのこと。

これといってルールはないらしいからまともで安心した。

初日は午後からだそうなので与えられた自室で休んでいることにした。

いい機会だし先生に対する印象を話そう。

初め先生をみたときキャラに似てたりしてまたイヤなのがきたー。

そんな認識だった。

それが変わったのは街で会ったときだ。

私が常識外れなPCのパーツをみて悲壮的になっていると、横で先生が「うわっ！なんでテレビで取り上げられねえをだろ。」とか言っていた。

そこからは早いものだ。外の技術との違いなど、彼は珍しく常識があった。

つい愚痴をこぼしてしまつてそれが止まることなくしばらく話し込んだ。

ただ頷いて聞いてくれるだけだけど、私は気が楽になった。

以降、偶に寮長室に足を運ぶようになり、地ではないが本音の言える人になった。

憧れ、なのだろうか？口には出さないがやはり彼も『異常』を感じ

れていると思う。

それでもそのままに振る舞える彼に憧れを抱いていたんだろう。

そんな認識も今日までだがなっ！

いまじゃ、人外筆頭、ただのバカップルだ。

「おーい、千雨ー！そろそろ始めるぞー」

さて、思い出話は此処までだな。今は修行に励みますかっ！

「はあーい。今行きまーす！」

どうも、ちょこちょこ登場している天の声です。これからの話の前に他の人の様子を見て見ましよう。
まずは我がヒロインエヴァちゃん！

「はあ…」

レインは千雨を抱え行ってしまった。全く、私の運が悪いのか？それとも彼奴の間の悪さを呪うべきか…。

「はあー。学園に来てから、レインと一日いたことないな。しかも弟子とは…」

只でさえ一緒に居る時間が少ないのにまた減ってしまう。
それに相手は女…

「はあ…。」

自分が好いてる相手が他の奴に好かれるのは悪い気はしない。寧ろ誇らしい。

だが、彼奴はああ見えて真面目だからなあ。私が支えてやらねば。

「そうと決まれば長谷川の着替えでも持ってってやるか。どうせ用意してないだろ。…私の服でいけるか？寝巻きならゆったりしてるし、いいか。」

エヴァは今日も甲斐甲斐しくレインに尽くす…。

さーて、残りは二人！せつちゃん行こー

あれからよく考えた。
このちゃんのため…。
まず疑問に思っただのはクラス編成。

魔法を隠すなら、一般的な生徒に混ぜるべきだ。しかし2 - Aは魔法関係者が集まっている。

次に魔力。

今このちゃんの魔力は垂れ流し状態で、少しでも魔法をかじっていれば魔力がかなりあることも分かってしまう。

長は学園長に任せるためなにもしなかったが、学園長も最高クラスの魔法使いだ。封印、偽装魔法などで、魔力を隠す程度はできるはずだ。

『寧ろ全て疑ってかかれ。』

その言葉は正しいかもしれない。
しかし私は…。

私は…

このちゃんの側にいて良いのでしょうか？
教えてください…

レイン先生…

らすとー！真名ちゃん

彼、レインさんは英雄だ。

かの『紅き翼』の一員であり、全てにおいて『紅き翼』のメンバーに勝っていたと言われる。

刹那が彼に襲いかかり、彼の様子を見て、私はある人物を思い出した。

『白銀の死神』、『狂美の銃騎士』と呼ばれる同じく、レイン、という賞金首だ。

この二人は一般的には別人とされているが、銃騎士の主である、『冷徹の主君』が出現する時期、場所とあの二つの名を持つもの出現位置が一致している。

つまり麻帆良に『冷徹の主君』エヴァンジェリンと『レイン』がまた同時期に現れたということだ。

これは…本人に聞くしかあるまい。

「さて、私は生きて帰れるかな？」

確認するため私は封印されているため比較的 안전한マクダウェル家へ向かう。

天の声、略してテコです。

字数も稼げましたし、本編行きましょう。

初日には心構えを聞かされた。

精神が弱いと修行についていけないらしい。一体なにするんだよ。

私はアーティファクトとやらで幻覚を見せられた。

自分が戦場において、敵をひたすらに殺し続け、敵に刺され死んだと思ったら別の戦場にいる。そんな夢だった。

はじめは吐いた。

幻覚の筈なのに、

人を斬るあの生々しい手ごたえが、

断末魔が、

肉を斬られる痛みが、

命乞いの声が、

全てが鮮明に感じられた。

嫌だった。もう殺したくない。でも体は止まらない。断末魔というBGMが永遠に聞こえる。

殺した数を忘れるくらいになるとなにも感じない。

「ああ、この人は死ぬんだなあ。」

この程度の認識になった頃、目が覚めた。

そこには心配そうな顔をした先生が居た。

安心に涙が流れ、不覚にも抱きついて泣いてしまった、情けない。

夜中、泣きつかれた頃先生が赤い宝石をくれた。

レイジングハートを元につくったらしいデバイスで、AIはそのままレイジングハートのコピーデータの記憶を初期化しただけらしい。

少しだけ楽しみだ。

五日目。

修行が始まり五日たっても未だにアクセルシューターでの魔力底上げとコントロールしかやっていない。

この技は応用がかなり利くのでこれだけマスターすれば同ランクの戦闘なら戦えるだろう。

訓練内容は10個のシューターを出して先生が闇で作った的を延々と打ち抜き続けるのみ。

食事休憩もスフィアを消すことは許してくれない。

当然倒れまくるのだが、回復魔法と空気中の魔力を吸う魔導具が倒れる度にオートで起動して即回復。
精神が持たない。

まああの精神訓練よりは何倍もいいけどな。

ちなみに二日目の夜エヴァ（呼べと言われた）が服を持ってきてく

れた。先生はなにも用意出来ていなかった用で叩かれてた。この人大丈夫か？

10日目、やっと別の訓練に移れた。

弾幕をアクセルシューターのみで避けるという単純なものだがかなり難しい。

なにより弾幕が鬼畜過ぎる。初めは被弾しまくったが、途中からは私も馴れてきてスフィアに乗ったりして避けれるようになった。(後から聞いたが普通できることじゃないらしい)

20日目、霊力を使った弾幕の張り方を教えてもらったんだが、先生の教え方は抽象的すぎる。

「こつ腹の当たりにグツと力をいれて弾幕をイメージしながらバツと霧散させる感じでっ！」

って分かるわけねえだろ！

後から来たエヴァにすっかり教わって出来るようになった。

弟子を育てる自信があったらしく一日ほど引きこもったけど、エヴァが部屋に入ったらすんなり出てきた。

恐妻家？いや、あのとき聞こえた鈍い音からそんなもんじゃねえ…！

最終日

「さて、最後の試験だ。内容は簡単、俺のシールドを撃ち破ればク

リア。」

先生のシールド滅茶苦茶堅いじゃん。
常時展開の障壁も破れねえのに。

「さすがに無理じゃないか？」

すると横からエヴァが言う。

「気づいて無いようだが、お前の戦闘能力はかなり高いぞ。タカミチと善戦できるくらいにはな。」

だけど訓練はかなり地味だったし、相手は企画外だからなあ。

「ちなみにタカミチは英雄と呼ばれた奴の弟子だ。最強一歩手前の奴に善戦できるんだ。」

「へえー。やっぱわかんないわ。」

先生は苦笑する。

「やればわかる。お前の最高の技で来いっ！」

そこまで言われると嬉しい。

うーん、アレを試すか？いやアレしかないだろうな。普通の攻撃じゃ無理だ。

「よし、レイハ、頼むぞ。」

「了解です、マスター。」

白色の魔法陣が敷かれる。

砲撃はさらに鋭さを増し、シールドを破壊して先生を貫く…っ、
ああああ！

爆発音はなく砲撃は湖を裂き消えていった。

「はあ…はあ…。先生っ！大丈夫か！？」

先生殺しちゃった！？
焦っているってエヴァが来た。

「まったく、随分派手にやったな。誰が修理すると思ってるんだ…。
ん、なんだこの血は…」

周りに飛び散っている血を嘗める。
ヤバイ…、なんて言われるかつ！
だけど予想とは反して呆れた表情になった。

「まったく、弟子の力量を見誤るとは…。あいつ、絶対師匠に向い
てないだろ。それと千雨、試験は合格だ。レインはすぐ蘇生するか
ら気にするな。ではな…」
「えっちよっ！まっ…」

言い切る前に私は外に出された。蘇生って…

とりあえずパツとしないけど合格したみたいだ。私が一番思ったの
は…

「なんであんなに熱くなってんだ私…。キャラじゃねえよな。」

――長谷川千雨・合格

十五話 毎回サブタイ考えるのはキツイ（後書き）

千雨はタカミチになら善戦できると書きましたが、力とかなら余裕で勝ってます。しかし経験の違いと言う奴です。

言い訳タイム。

マイソロ3にハマってしまいました…。

魔法剣士はいいですね。ソロでも余裕でいけます。

ガンマン、強すぎです。楽々過ぎて辞めました。

仲間にはマルタを愛用。釘宮さんの声可愛すぎっ！

一番思ったのはレディ武具は性能良すぎですよね。

おっと、長々と申し訳ない。

今回はどうしようか、マナと刹那は強化してから薬味を呼びたいですよね。

他は薬味関連イベントで関わって行く予定です。

薬味には誰を残そう…

いどのえにつき、があるからのどかは確定なんです…。

それでは皆様、また会う日まで、お元気で。

ステータスとおまけ（前書き）

空白期にかなり強化されたんでステータスです。

それだけじゃ寂しいのでおまけを乗せときます

ステータスとおまけ

レイン・マクダウエル

種族・吸血鬼（神製）

筋力 E X

魔力 E X

耐久 E X

幸運 A

敏捷 A +

《保有能力》

・ 平行世界魔法

平行世界の魔法を条件問わず魔力により使用可能。
但し、個人のアビリティは使用不可。

・ 限界突破

あらゆる限界を無視できる。

その為魔力等の増加限界がなく、増やし続けることが可能。

・霧化

吸血鬼の伝承より。

身体を霧に変える事が可能。

なお、人工的な吸血鬼では出来ない。

・吸血

吸血鬼の伝承より。

血を飲む事により魔力を回復できる。

回復量は血の保有者に依存する。

・狂化

理性を犠牲にして戦闘能力を何倍にも増加することが出来る。

段階によってはある程度理性を残せるが、最大だと敵味方の判別すら困難になる。

・殺人衝動

普段抑え込んでいる殺人衝動を解放して対人の場合のみ戦闘能力を上げる。

狂化と似ているが此方は殺人時の快楽に身を任せるため、理性を失う訳ではない。

性格が破綻するため、周りからは悪評ばかり。本人は気持ちいいの
で使いたいらしい。

《宝具》

・直死の魔眼

あらゆるモノの『死』を認識できる。

制御が完全に出来ている為ON・OFF切り替え可能。

ランク EX

種別 対人宝具

レンジ 1〜

補足 1〜

・言霊

言葉に魔力を乗せ、無機物から人まで操る事が可能。
対魔力により、レジスト可能。

ランク A

種別 対人宝具

レンジ 1〜10

最大補足 1〜10000人

・惑い狂う鐘

鐘の音を聞いたものに幻覚を見せる事が可能。

ランク EX

種別 対軍宝具

レンジ 1〜1000

最大補足 1〜

《〜程度の能力》

・ありとあらゆるモノを破壊する程度の能力

その名の通りで、初期は『目』を潰すことで破壊していたが、最高ランク故視界に入れたモノを破壊と念じれば発動出来る。

・闇を操る程度の能力

闇を操れる。また闇に質量を与えられる。
闇、影を介せば転移も可能。

《追加点》

なんとなくで試した霧化に成功してから闇の中に霧で紛れて手だけ出して武器を使うと言う暗殺術じみた事が出来るようになった。

また〜程度の能力で『力』を破壊したり『概念』すらも破壊できる。但し、妖力消費が激しいのがネック。

因みにレインは某白い悪魔の魔王魔砲を使用出来る。
リンカーコアまでチート成長しているので本当に星を破壊できる日もそう遠くない。

多数のマジックアイテムを自作しているが、ネタの為に作られた物ばかりで、実用性はあるがキティ曰く高評価するのは研究者として

のプライドが許さないらしい。

零「以上、レインのステータスだよ。いっそのこと無敵チートにしちやっただんです。」

レイン「余程のことが無ければ戦闘など在于てないような物だ。」

零「戦闘じゃなくて一方的な虐めになるからだよね。今のところネギま！の世界で本気を出す気はあるの？」

レイン「ないな。本気出すと星が壊れるから出したくとも出せないし、つてのもあるがな。」

零「ネギま！世界崩壊ENDなんて洒落にならないよね。しかも崩壊したのが旧世界じゃなくて地球とかWW」

零「さて、後半は本編で登場した名前が出た便利アイテム『神様印の魔導書シリーズ』を得た時の話を紹介するよ。」

レイン「ああ、あれは俺が初めて天界へ行った時だな。それでは見てくれ。」

おまけ話〜神様の世界へ〜

「それじゃあキティ、お休み。」

「すう……すう……」

何時も通り男女の営みを終え、俺は眠りにつく所だ。

「そっぴや避妊してないのに全然孕まないよなあ。」

俺達は一度として避妊をした事はない。それでも何も無いのは男として残念だ。

別に吸血鬼に生殖機能がないわけではないのだが、受精確率はかなり低い様だ。

早々に思考を放棄して眠りにつく。

「知らない天井だ……。」

目が覚めると見知らぬ部屋にいた。

此処は？いや俺は部屋で寝た筈だ！俺をこんな風に出来る奴は……。

「何を企んでいる神。」

「あら、分かった？気配は隠していた積もりなんだけど。」

部屋の扉から彼女が出てきた。

彼女は若干関心したように言葉を漏らした。

「確かに気配は無かったが、こんな事出来るのはお前以外居ないしな。それに」

「それに？」

「変わった力を感じるんだ。妖力でも魔力でも霊力でもない力を。これが神力ってやつだろ？」

言つと彼女の顔から何時ものからかう様な表情が消え、心底驚いた
というような表情になった。

「すごいわね。まだ数回しか会ったことが無いのに神力を見つけれ
なんて。」

そんなに難しい事なのか。

「俺の中にそれで出来たパスの様なモノがあるんだ。お前と契約し
て出来たんだから神力で出来ててるんだろ？」

「確かにある筈だけどだからってそう簡単に認識出来るものじゃな
いわ。……上の言つてたことは本当になりそうね……。」

「なんかいつたか？」

「いえ、気にしないで頂戴。」

何か聞き逃したような気がするが、まあ良いだろ。

「所で今回はどんな様だ？毎回厄介事持ってくるのは勘弁して欲し
いんだが。」

「そんなに厄介な事ばかりかしら？私からの厄介事は少ないわよ？
殆ど上司からよ。」

でも全部お前が呼んでんじゃねえか。とか言わないけど。

「今回は貴方にプレゼントがあるのよ。」

「プレゼント？」

「ええ、もうすぐしたら貴方に人生最大の面倒事が来るでしょうし。」

「

人生最大？今までも十分イヤだったがな……。て言うかもう俺は人外だし妖生か？

「取り敢えず天界に来て貰うわ。心配しなくても人間と大して変わらないわ。暮らしてるのは天使とかだけだね……。」

「天界に行くのは構わないが肉体はどうする？此処にいるのは精神体なんだろう？」

目が覚めないとキティにまた迷惑かけるし……。

「ふふふ、これでも私は神なのよ？あなたの世界の時間は止めといてあげるから心配ないわ。」

世界を止めるとかすげえな。俺も何時か出来るようになりてえな。

「それじゃあそろそろいくわよ？」

「どうやっていくんだ？」

『我は輪廻を司る神。我が名、アリスの名の元に天へと続く扉を開け！』

あいつが詠唱を終えると地面に魔方陣が現れ、やがて扉が現れた。

「お前、そんな名前だったんだな。そっぴや名前も知らなかったぜ。」

「別に教える必要なかったじゃない。これからは名前で読んでくれて構わないわよ。・レイン・」

「そうか、改めて宜しく頼むぜ、アリス。」

どちらからでもなく笑う。そうして俺達は天界へ向かった。

「ところでレイン。貴方、そんな見た目なんだからしっかり口調も合わせなさいよ。」

「嫌だ！俺は男だ。男なんだあああ！」

「折角貴方の好きなキャラにしてあげたのに……。」

「やはり貴様かあああああああ！！！」

長年の疑問が解けたレインだった。

扉を抜けるとあったのは洋風な町並みだった。歩いている人達も人間と変わらないように見える。

「ああ、翼なんか何時も出してたら邪魔でしょ？基本しまっているのよ。」

疑問が顔に出ていたのかアリスが答える。

「なあ、それで俺達は何処へ向かうんだ？」

「私の家よ。」

アリスの家か……。やっぱり神なんだし豪邸か？本人は幼女だけど……。

「あたっ！」

「失礼なこと言うなつ。」

地の文読むなよ。躰のなっていない幼女だな。親の顔が見たいわ。

「幼女言わないっ!」

「だから地の文読むなよっ!マジお前なにもんだよっ!？」

「神よ。」

「そうだった……。」

そんなこんなでアリス（幼女）宅

アリスの家は適度な玄関に適度な庭、適度な外見で適度な大きさだった。

「……………」

「なによ。」

「なんつーか……偉く普通だな。むしろ普通を極めたいのか？」

普通過ぎるっ!ただでさえ出番少ないのに家まで地味じゃあな……。

「そんな訳ないじゃないっ!その……私はデザインセンスないから友人に頼んだらこんなのに……。」

思い切り人選ミスだろうな。

「見る目ねえなあ。まあしゃあないか、アリス（幼女）だし……。」

「なんか今失礼な副音が聞こえた気がするんだけど……。」

「気のせいじゃね?それより早くプレゼントとやらをくれよ。」

地の文読めるくせに此方は分からないのか。

アリスは溜め息をつくると本棚に手を翳した。すると左右に動き真ん中から別の本棚が生えてきた。

「すごく……神々しいです。」

アリスは本を三冊出して俺に手渡す。

「魔導書の類いか？」

「ええ。神の間なら誰でもはじめのころ使ったわ。表紙に手を当てて。」

言われた通り手を当てると一瞬光、無地だった表紙に文字が浮かび上がる。

「何々、『突然の怪我！』だけど道具がないっ！そんなときはこれ一冊』？なんだ？」

随分ふざけた名前だな。

「それは治癒魔法の書よ。後は隠密を主とした補助魔法の書とか攻撃魔法とかがあるわ。」

やっぱり魔導書だな。しかしこの程度俺でも楽に出来るぞ。

「その本に記憶されているのはどれも最高ランクの魔法よ。勿論、神なら必須スキルなんだけど貴方には丁度良いと思って。使用法は使いたいページを千切って魔力を込めるだけ。」

「へえ、すごい便利アイテムだな。」

「まあ用はこれくらいね。なんなら街を回ってみる？」

確か武器屋があつたな。

「そうさせて貰う。だが金なんて持ってきて無いぞ。」

「私があるわよ。それくらい。」

渡されたのは銀貨が五枚。

価値がわからないぞ……。

「それで鉄剣くらいなら買えるわよ。もっと欲しいなら……」

アリスは近くの店を指差す。

何処からどう見てもカジノだよ。金は自分で増やせってか。

「まあ貴方にはそんな勇氣は無いわよね。クスクス。」

ブチッ

「フハハハ！後悔させてやるぞっ！」

全てをチップに変える。そしてルーレットへ向かい全てを賭ける。

……

「ちょっとレイン！流石にそれは……。」

「ハッハッハッ！まあ見てろ。」

苦笑しながらディーラーは玉を入れた。

ゴクッ

カラン

入った………0に。

「いよつしゃあああ！！見たかアリスッ！やってやったぞ！ハッハッハ！！」

「な、なんて運なのよ……。0に入るって……。」

それから俺はスロットやポーカーなどで億万長者となった。そしてその金で無駄に神秘のある武器を買い集め全てを使いきり、目の前で稼ぎまくったレインに乗っかるように参加したアリスは金をため、また新しいセンスのいい家をかき満足したそう。

めでたしめでたし

ステータスとおまけ（後書き）

まあ今回は以前から書き留めていたので、早く書けました。

卒業したので春期休暇は若干ペースアップがんばります

それでは皆様、また会う日まで、お元気で。

十六話 フラグと誤算（前書き）

変わらなかった投稿時間。

理由は連日打ち上げに出かけている。

十六話 フラグと誤算

千雨の訓練が終わった。いやーまさか本当に破られるとは思わなかった。

てか、魔力スフィアに乗るとか規格外過ぎるだろ。

弾幕の方は空白のスペカ渡しといたし、才能はあるから問題ないか。

ちなみにドリル状の砲撃を喰らって体が殆ど消し飛んじまった。

再生したらしたでキティの説教…。

とまあ色々あつて俺達はキティ宅でティータイムだ。

「なあレイン。」

「ん〜？」

「長谷川だがどう思う？」

キティからのイキナリな質問。

「化けると思うぜ？もう人外レベルだし実践経験さえあれば詠春あたりとやり合えるんじゃないか？あり、こう考えるともう化けてんな。」

「やはりそうだよなあ。幾ら厳しくしたからとはいえ、一月程度でアレは異常だ。だからー」

「世界を見せた方がいい、か？」

「ああ。いくら幻術で見せていても知ってるのは裏とはいえ表層だ。アレだけの力は危険すぎる。」

確かにキティの言うことは一理どころか多々ある。

組織の闇を見せたところで個人の闇も多い。
薬や催眠が使われればいくら力があってもおしまいだ。

「夏期休暇にでも魔法世界に連れてくか？」

「それがいいな。所でレイン。茶々丸のメンテナンスが終わるまで
まだあるしどこ」「ピンポーン

「ん、客だな。俺がでるよ。」

「……………orz」

「はいはい誰だぁー、って龍宮じゃないか。どうかしたか？」

来たのは龍宮だが俺をみた瞬間固まってしまった。

「あぁーどうもレイン先生。所でここはエヴァンジェリンの家です
よね？」

「当たり前だろ。それで、何のようだ？もしかしてキティにか？」

「（私がおかしいのか？しかも愛称！？）なんでレイン先生がいる
んだい？」

ん？俺の立場は…新任教師が教え子（少女）の家においてなおかつ愛
称で呼んでいる。

ふむ、俺変態じゃね？

「なるほど。おまえが疑問に思う理由が分かった。序でに俺の立場
が危ういことも…」

「いや、いいんだレイン先生。お陰で確証を得れたよ。あなたが『
狂美の銃騎士』だね？」

っ！？まさかその名前を出してくるとは…。それを教えたのは紅き翼だけだ。つまり…

「傭兵の癖に鋭いじゃないか。いや、傭兵だからか？MMの老害共は騙せたんだがな。」

「それほどでもないよ。所でその銃騎士をお願いしたいんだけど…」

…傭兵だし口止め料か？それなら助かるんだが…
龍宮は少し恥じらうように目を逸らして

「…そのーなんだ、私を鍛えてくれないか？」

は？鍛える？

「龍宮は強いじゃないか、その年である腕はすごいよ」

「レイン先生、私は傭兵だ。自らの身を守るのにも金を稼ぐのにも、力があるんだ。（貴方の事が気に入ったしね）」

確かに傭兵は強ければ強いほど報酬は増えやすい。

「詳しい話を聞こう。中に入ってくれ。」

「失礼します。」

とりあえず部屋まで通す。

「キテイ、イスを一つ追加だ。客だ。…いつまで落ち込んでるんだ。」

話しかけると涙目でにらんでくる。

もういや……………

十分後……

「取り乱して済まないね。レイン先生、考えてくれたかい？あとエヴァンジェリンの許可。」

「私はそこまでケチではないっ！」

キティは正直になればいいのに。ってかそれ以前に

「すまんが、俺が教えられる事なんてないと思うぞ？」

「……どういう事だい？」

「だって俺がやることといえばただ弱点に撃つだけじゃないか。それに龍宮はスナイパーだから余計教えることがないな。」

俺は近距離で『点』を撃つくらいだし。

龍宮をみると若干落ち込んでいるように見える。

「代わりと言っちゃあれだが、俺が昔使っていた双銃をやるう。」

久々に王の財宝から昔の相棒を出し投げ渡す。

「おっと、重いな。……随分と使われた銃だね。銘はあるのかい？」

「お前が右手に持つてるのが妖銃のソル。オリハルコン製だから壊れる事はねえ。ただ握っていると血が見たくなっちゃうから気を付けるよ。」

血をよく浴びた上に魔力の濃い所に放置してたせいかな少し呪いがついているのはご愛敬だ。

龍宮は少し笑顔が引きつっている。

「伝説級の鉱石で造られた呪いの品か……。もう一つの方は？」

「そっちは魔銃のルナ。ミスリル製で魔力伝達率は抜群だ。ただ伝達率が良すぎて握ってる間は常時気づかない程少量の魔力が吸収されてしまう……。まあある意味呪いの品だ。だが悪いことだけじゃないぞ？そのお陰で体感重量がかなり軽くなる。」

「へえ。私には2キロ位にしか感じないけど……。本当は何キロなんだい？」

「両方20キロだ。」

正直、常人ならこの2丁を持ったら満足に戦えない。

「それで弾薬は？」

「そこに使われているマガジンは特別製でな、使いたい弾を一発詰めると20発に複製される。弾のサイズに規定はない。」

ちなみに俺の作品。

「あとはルナは魔力弾を使える。ソルはもっと特別で妖力を使う。」

「妖力？それは私にも使えるのかい？」

ふむ……。龍宮は確かハーフだったよな。それにしても妖力が多い。

俺が妖力の量を見ていると龍宮は自らの身体を抱くようにして恥ずかしがる様に言ってきた。

「レイン先生、視姦するなら二人きりの時に・・・」
「っんな！？ち、違うつ！俺は妖力の量をつ！キティ！おお落ち着
け、だから誤解だつ！あぎゃあああああつ！！！」

五分後・・・

「龍宮は魔族とのハーフだったよな？妖力っていうのは妖怪や悪魔
なんかがもってるんだ。だから使えるぞ。ちなみに人間は霊力な。」

「へえ…。これはホントに貰っていいのか？どちらも値段も付けら
れない程の価値があるんだけど…」

そりゃオリハルコンに値段なんてつけられないわな。

「構わない。俺には新しい頼りになる相棒がいるからな。なあデザ
イア。」

「当然です、マスター。」

デザイアが喋るとやはり龍宮は興味深そう聞いてくる。

「レイン先生が作るだけあって超達と同じレベルじゃないか？それ
にそれが武器に？」

「ああ。デザイア、サイズモードを頼む。」

「了解ですマスター。」

不気味な赤黒い色に光り、中から背丈よりかなりでかい白銀の鎌が

でてくる。

「どうだ？なかなかの鎌だろ？対多のときは最強だ。」

「…私はどうしてそんな宝石がここまででかくなるのかが激しく気になるよ……。」

「ふんっ！こいつの他の作品はそんなことが些細に感じるほどバカげているわ。相手の攻撃を吸収して貯めてまとめて放出とか……うがあああああああっ！思い出しただけでイライラするう！！」

キティがガシガシと頭を搔く。

文句言われたって作れちまうもんはしゃあねえじゃん。

「まあキティの事は置いといて。作れちまうもんはしょうがねえじゃん。」

それを聞いて龍宮は少し引きつった笑いで応えた。

「そうか……。あ、そういえば刹那は学園の資料を見て唸っていたよ。レイン先生の忠告は聞き入れたのは大きな進歩だけど、まだ悩んでる様だよ。」

桜咲が一回で聞き入れるのは少し意外だな。もうすこしカタブツかと思ってたんだが……。

悪いことではないからな。しかし最後の一押しは手を出すべきか、時間が解決するのを待つか……。

「いや、後一步は自分で解決させなくてはな。情報感謝するよ、龍宮。」

「良いもの貰ったし構わないよ。後私は真名でいい。しかし……」

まだなんか言いたい事があるのか？

「随分とお人好しな賞金首もいたものだねえ。わざわざ一生徒に此処までするなんて。」

ニマニマ笑いながら言う。だが確かにその通りだろうな。

「じゃあないさ。こつという性分なんだからさ。」

ごまかす様に笑顔で言う。みる。

すると真名は頬を赤らめ目を逸らしてしまった。

あれえ？まさかフラグたてちまった？いや、まだ大丈夫だ！（それ以前に気に入られているし手遅れです）

「そそれじゃ、私は失礼するよ。」

真名はそそくさと家から去って行った。

次は茶々丸ちゃんかな。いや昨日気付いたんだがデザイアがあれば俺のデータだけ消すことも可能だ。

しかし茶々丸にしてみれば心をいじられてる訳だからこちらとしてもあまりいい気はしない。

まあ結局は割り切るしかないんだけどさ。

つーわけで今キティに茶々丸を迎えに行ってもらっている。

「今帰ったぞー。」

「うん、お帰り。」

「今晚は、レイン先生。茶々丸と申します。そしてマスターと未永くよろしく願います。」

「いやなんかおかしくないっ!?!」

キティとハモった。ってかなんだよ、出会い頭に。

「茶々丸。少しかまわないか?」

「はい、マスター(仮)。」

「ちよつと待て茶々丸!!なんで(仮)とはいえレインがマスターになっっているんだっ!!」

「私のソウルがそうしろと言うからです、マスター(前)。」

「なんで私が前なんだ!」ですから私のソ「茶々丸のバカヤロー
——!!」

うわ。キティが泣いて逃げてった。

かなり驚いた。ホントに茶々丸ってロボット? すごい人間臭いんだけど……?

「チツ、しゃーないキティの部屋行くぞ。」

「はい、マスター(定)。」

「いや、もうマスターとかいいから。」

「ではご主人様、と……。」

っ!なん……だと……!?!?

今更だが茶々丸のスタイルはかなりいい。豊満な胸、そして綺麗は緑髪に変わらない表情。

恥じらいながらというのもそそるが冷静なその表情でよばれるのも・

「グレイト・・・！」

「人の部屋の前で嫌がらせかバカヤロー！！」

「あべしっ！！」

何時の間にキティの部屋の前にしたのか扉が勢いよくあけられキティの怒りの隠っている足が出てくる。

しかしキティは気付いていなかった！

幸せな学園生活によりキティへの愛が臨界点を突破している事を・
・！そして今自分がスカートを履いていることを！

「黒・・・か。蹴っておきながらも見せるとはこれも愛。ならばこの痛みもまたご褒美とい「黙れ、気持ち悪いっ！！」「なばらっ！」

客観的にこの状況をみてみよう！

金髪ゴスロリ幼女がスーツ姿の銀髪美人（男）を踏みつけている。

そしてスーツ姿の銀髪美人（男）は顔を若干赤く染めている。

横には緑髪の機械っ娘が「記録中……記録中」と呟いている。

誰が見てもこう思うだろう

「カオスだ！変態だ！」、と

「ごほんっ！すまない、少々取り乱したな。」

俺とした事が危ない性癖に目覚めてしまった。（目覚めてしまつと
ころじゃなくて目覚めた）

「茶々丸よ、少しお前の記憶域を見せてもらつよ。」

「はい、構いませんよ。マスター。」

「グスツ…いいよ、レインがマスターで……」

さすがにキティが哀れだ…。

しかし俺のせいでもあるから慰めようがねえ。
後回しにして準備に移る。

「デザインア、頼む。」

『了解しました、マスター（私の出番少ない）』

ん？ が見えた気がする。まあ気のせいか。

んと…最新再生動画？みてるか……。
俺の目の前にメニュー画面みたいなのが現れるとキティも横から覗
いてくる。

……

再生された動画をみて驚く俺とキティ。

「なあ…茶々丸？お前この時どこにいた…？」

なんとこの動画は……

十六話 フラグと誤算（後書き）

はい、茶々丸可愛いですよー。
特別好きなキャラは出し切りしましたよ。

補足をしますと、真名が気に入ったのは彼の生き様です。主君の為にすべてを敵に回してきた覚悟です。
一目惚れとかもあるかもですがあしからず…

レイン君は大変な性癖に目覚めてしまいました。

ダイジヨブです、たぶん…。

みなさん、…か…。どちらが読みやすいですか？今回は混ぜてしまっていますのでみなさんの意見で決めたいと思います。

それでは皆様、また会う日まで、お元気で。

十七話 神様との会合、そしてネギ襲来!! (前書き)

早速矛盾を見つけてしまった……。

情けない限りだよ。

というわけで訂正しました

十七話 神様との会合、そしてネギ襲来！！

夜

明日、薬味がやってくる。

え？前回の続きを教えろって？

あの後茶々丸は簡単に止まったんだが良く考えたら超にバレてるってことで頭を抱えることになったよ。

最終結論はどうせ情報バラさないしどうでもよくね？って答に落ち着いた。

まあこんなもんだ。

取り敢えず明日はハプニング臭がしまくりなので早く寝ることにする。

で、そのハプニング臭は夢にも感じていたようだ。

目を開けたらアリスの部屋だった！

ってまたかよっ！連れてくる前に念話なり何なりしろよっ！

「はあ〜い今晚は…！っていきなり殴らないでよ。」

「んなこたあどうでもいい。今日はなんで喚んだ？」

「どうでもいいって……。それに前に言ったじゃない。人生最大の面倒事が来るって。」

ん？あんなこと言われたような言われなかったような……。

「言ったわよ。証拠に前々話のオマケを見てよっ！ちゃんと言うてるでしょ。」

うわっ、メタメタな発言してんじゃねえよ。それになんか不機嫌じゃないか？

「んで天界へ行きゃいいのか？魔界とかは勘弁してくれよ？あそこじゃバトルジャンキーしかいやしねえ。」

「ここでいいわよ。じゃあいくわよ。レイン・マクダウエル！貴方を私の使い魔の立場を離れ中級神になることを命じます！拒否権はありません！」

はえ？俺に神になれってか！？

H A H A H A！冗談が過ぎるんじゃないのか？

「ってどーいう事だアリスツ！それに俺に拒否権がねえっつて理不尽過ぎんだろっがっ！！！」

「貴方の力は大きくなりすぎたのよ……。他の神達はこれ以上力をつけられたら抑えきれないのよ。だから」

反旗を翻す前に、神にして味方にしまえっつてことか……。確かに理にかなってるな。

「貴方は自分の力を自覚するべきだわ。力だけなら上級神と張り合えるのよ？900年で此処まで力を付けた奴は今までいなかった。だからこればかりは私にはどうしようも出来ないわ。」

神と同ランクかよ。そりゃ人間を雑魚にしか感じない訳だ。

「神になって俺にデメリットは？」

「取り敢えず今居る世界とは少し離れるわね。でも大丈夫よ。神に為れば分身的なもの置いていけるし貴方のランクが上がれば時空間くらい移動出来るようになるわ。」

終わればいつでも戻ってこれるというわけか。だが一番だいじなのはそこじゃねえ。」

「キティを……。連れていけないか？」

「なっ！？神の試験に部外者を連れていくなんて無理に決まってるじゃない！」

そう……か……。

「いや、方法はあるぞ。」

目の前に行きなりおっちゃんが見れた。しかし威圧感が桁違いだ。

「ゼウス様っ！？どうしてこのような場所に……。」

「いやなに、若者に救いの手をも思ってたな。」

ゼウス？神話の神じゃないか！なんか見た目ジジイだから神にすら見えねえけど。あ、んなこと言ったらアリスとか大変か。失敬失敬。それよりキティを連れていく方法があるって？

「その方法って？」

「簡単じゃ。そのお主の女と魂を混ぜるんじゃ。つまりお主等が同一存在と為れば試験にも連れていける。簡単じゃろ？」

「要は俺とキティを融合？むう、キティを此処に喚べないか？流石に一人で決めるのはちょっと……。」

俺だけじゃなくキティにも影響があるとすれば話は別だ。

「ふおふおふお、そう言うと思ってな、喚んでおいたぞい。」

パチンッ

ゼウス？が指を鳴らすとまたイキナリ目の前にキティが現れた。
キティまで怒ってる……？。

「おいキティ。なんか怒ってる……？」

「怒るに決まってるだろっー！」

「くぼあっー！」

ドロップキック……だと……？

流石に全体重を乗せた蹴りを咄嗟に耐えることは出来ない。

「まったく……。何か隠してるとは思ってたが、神やら何やらとスケールがデカ過ぎだろ。」

呆れた様に……いや、実際呆れてるんだろう。やれやれと首を振る。

「……さっきじじいから提案された内容、お前はどっと思ってるんだ？」

ちよっ！ゼウスをじじいってWWW

「俺は喜んで実行するよ。キティとひとつになるんだ。断る要素がひとつもない。」

「私も同意見だ。寧ろ喜ばしい。じじい、やってくれて構わん。」

「うむ、では……。お〜いや〜まちゃ〜ん。」

イキナリバカに成ったかのように叫ぶゼウス。

アリスが頭を抱えているしいままでもあったんだろう。

そしてふざけた呼び声に答えたやまちゃん？が空から降ってくる。

「喚ばれて飛び出てジャジャジャーーン！毎度お馴染み儀式の神様や〜まちゃ〜んで〜す！」

かなり時代遅れの台詞と共に降ってきたのは最近天の声だけで大活躍あの山ちゃんボイスを持つスーツ姿のイケメン。

なのだが、厭らしくニヤニヤした表情によって全てが台無しだ。

「ほいじゃ山ちゃんやつちゃって。」

「はいはい。リリカルマジカ……じゃなかった。ほいなあ〜」

おい、いまリリカルマジカルって言おうとしただろ！

指を振った瞬間俺たちは光に包まれたが一瞬で解けた。

なんともないぞ？

「はあい儀式の終りだあ！魂は時間経過で徐々に合わさって行くよ。それじゃあ役目の終わった山ちゃん去りますよ〜。え？行かないで！愛しの山ちゃん！だって？今更止めても止めませんよ？じゃあ〜ね〜！」

.....。

空気が重い。ゼウスは責任を感じてるのか、益々暗い。

「そ、それじゃあ儀式は終わったぞい。サヨナラ。」

「え？それはないんじゃない？あつ！クソジジイ！アリスはまたなあ
」

「ふんっ！」

キティはむくれているが大丈夫だ。問題ない。

と此処で何時も通り帰るかと思ったがそうしてくれないようで、アリスだけ居る空間に喚ばれた。

「んだよ。なんか用か？」

「言わなかったかしら？貴方はその世界を離れることになるって……。タイムリミットは学園祭終了まで……。」

「そうか……。案外速いんだな。」

「そうね。理由を言っておくと、あの事件後に転生する奴なんて居ないと行っていいわ。居ても私の権力で何とかさせるわ。」

「ハハツ！頼もしい限りだ。」

「あの儀式で貴方の今の階級は下級神よ。試験をパスし次第中級神へ格上げされるわ。」

「了解。」

「言いたいことはそれだけよ。その世界での余生を楽しみなさい。」

ハハハ、らしくないこというねえ。

「じゃあな。」
「ええ。」

俺の意識は闇に落ちる。

目を覚ますと朝だ。

あれで喚ばれてるときは寝てない事になってっから疲れが取れない
…。

「ふあゝ、新任教師襲来か……。……。めんどくせ。」

軽く鬱になってるとトントン、とドアが叩かれる。

「おはようございます、ご主人様。朝食が出来ておりますのでマスタ―が起き次第いらして下さい。」

あ、そっぴや昨日はキティの家に泊まったんだっけ。
寮の方は『短期出張』の札を貼つといたから問題ない。

新任教師が来るのに遅刻してはいけない。キティを起こす。

「キティゝあさだよゝ。おゝい。」

「うゝ耳元でさけぶなあ。」

「俺は先に学校行ってるぞ。」

「行ってらっしやゝい。」

相変わらず朝がよわいな。

「(デザイア、撮れてるか?)」

『（勿論ですマスター。）』

寝顔を撮るのは日課だ。

それから俺は飯をかつ込み結構時間が危ないので急ぐ。

麻帆良通学路

「取り消しなさいよ!!」

「ふふふふふ。」

人の殆どいなくなった道に響くウザったい子供の悲鳴と明日菜の怒声。それを微笑ましく見守る木乃香ちゃん。

木乃香ちゃんとは日頃からよく話すよ？刹那の事とかで。

色々助言とかしてたらアレ、木乃香ちゃんがヤンデレ化しちゃってさあ〜。今も黒いオーラ纏ってるよ。

「明日菜、何があっただ？」

「あら、おはようさん、レイン先生」

「レイン先生っ！聞いてくださいよっ！この子が私にイキナリしっしっ失恋の相が出てるって!。」

目を凝らすとまあ薬味がじゃないか。

「取り敢えず手を離せ。何があっただとしても確り話す前に手を出したらそっちが悪人になっちまう。」

「すつ済みません……。でもっ」

謝りながらも話そうとする明日菜を手で制し、
「やれやれ、といかにも被害者だといった感じにいるやく……もといネギに拳骨をしてやる。」

「うっ、なにするんですかっ!」

「お前は反省しやがれクソガキ。お前が原因じゃねえか。」

「うっ……。はっはく、いだっ」

「むくれてねえで謝れ。明日菜もだ。」

「悪かったわね。」

「ごめんなさい……。」

「つたくなにくしゃみで武装解除しようとしてんだよ。
魔力はいいんだが、宝の持ち腐れだな……。」

「おっい、ネギ先生!」

「タカミチっ!」

「たっ、高畑先生っ!」

「タカミチィィ。やっぱりお前かぁ!
瞬間で近付いてOHANASHI……。じゃなくて『お話』しないと
な。」

「レインさん……。?な、なんか真っ黒い霧が見えるんですけど……
幻覚……。ですよね?」

「ハハハハ、そんなものあるわけ無いじゃないか。所でタカミチ。少しOHANASHIしないか？」

いい笑顔で路地裏に誘う。

何時もと違う俺を見た明日菜と薬味は顔を青くして見ている。木乃香ちゃんはずがだよ。せつちゃんに害がなければ何もしないんだから。でも、後ろに回した手に金槌が握られてたよ……。

「あは、あははははは。さ、三人とも、遅刻するんじゃないよ。僕もすぐに……ちよっレインさん！？腕はそっちに曲がりませんよ！あ、ぎゃあああああああああ！！！」

逃げるように去っていった。

勿論、タカミチの腕は一本貰ったがそれが本題な訳がない。

「アイツ等に行ったぞ。聞かせてくれるよな？」

「ああ分かったよ……。でも出来れば腕を治してくれないかな？」
「チツ！」

あからさまに舌打ちをしてるが一応『ケアル』を使ってやる。

「ありがとう……。彼はナギさんの息子だよ。メルディナから来たんだ。と言っても学園長が話してくれると思うよ？」

「そうならそう言え。『テレポート』」

学園長室の前に出る。授業は始まっているので生徒は当然いない。タカミチ？態々連れてくるわけ無いじゃないか。邪魔な扉を蹴り破って乗り込む。

「ふおっ！レイン殿か……。どうかしたのかのう。」

「どうしたもこうしたもねえよ狸爺。あの馬鹿の息子が来るそうじゃないか。しかもメルディナの出だつて？あの犯罪者育成所から出てきた奴を連れてくるなんてよくもそんな真似できたなあ。ア、ア？」

正義の為ならとかなんとかで法律など無視させてるじゃないか。

「それは言い過ぎなんじゃないかのう。」

「何処がだよ。いいたりねえ位だ。まあもう少してアイツ等が「扉がないっ！？それより学園長っ！このクソガキが先生ってほんとうすか！？」来たな。」

明日菜ちゃんは扉がない事に驚いたが直ぐに学園長に詰め寄る。木乃香ちゃんはもう金槌隠してねえよ。

「まあ落ち着きなさい。ホレ、自己紹介をしなさい。」

狸爺に促されて薬味は一步前に出て息を吸い込む。

「今日からここで先生をするネギ・スプリングフィールドです。よろしく願いますね。」

「よろしゅうなー。でも、せつちゃんになんかしたら……うふふふふふふふふふ」

く、黒いぞ木乃香ちゃん……………。

「それでのう、実はネギ君の部屋が見つかっておらんのじゃ。生憎職員寮も空気がなくてな。それでなのじゃが君たちの部屋の泊めてもらえんかのう？」

は？この狸爺なにぬかしてやがる。
やっぱりそれを聞いた明日菜ちゃんが食ってかかる。まあそれが当然の反応なんだけどな。

「そんな！？こんなクソガキと同じ部屋なんていやですよ！！」
「うちはべつにええよ？そのほうが面白そうやし……………」。

木乃香ちゃん……………やっぱりいい性格してるよ。

「おいこら狸爺。まさか本気でそんなこと言ってるんじゃないだろうな？駄目に決まってんだろうか。いくらガキとはいえコイツは教師になるんだ。生徒と同棲なんて問題しかねえじゃねえか。」

キティの家によく泊まる俺が言えたことではないが俺、は見つかってないからセーフだ。

とまあ正論をぶつけてやるとまさか俺に反論されるとは思ってなかったのか若干焦りだした。

こいつバカか？？

「し、しかしどの部屋も空いておらんし……………」。

「俺の部屋に泊めとけばいいじゃないか。どうせ寮長室は無駄に広いんだ。ガキ一人増えたところで支障はない。」

むしろマクダウエル一家がいても十分なひろさだから一人じゃなにかと虚しいもんだ。

俺の発言を聞いた明日菜ちゃんはあからさまに安堵のため息をついている。

「むう、お主がそのような提案するとは思わなんだわい。」

「当然だ。生徒に厄介事を押しつけるお前とは違うんだ。」

「あいわかった。ネギ君、お主はこのレイン殿と暫く暮らすことになる。彼は態度は悪いが教師としては頼れる。存分に宛にするがよい。」

薬味……げふんげふん、ネギは一瞬露骨にいやな顔をしたがすぐに表情を引き締める。

ああ……キティとの癒しの時間が減ってゆく……。

「えと、よろしくお願いします！！レインさん！！」

まあ、コイツ矯正するには丁度いいか。

……ついでにマンガやゲームの素晴らしさも教えておこう。

「ああ、明日菜ちゃんと木乃香ちゃんは先に教室に行つといてくれ。遅刻については俺からじじいに脅し……もといお願いしとくからよ。明日からは遅刻すんなよ。」

結構遅刻のことを気にしていたのか明日菜ちゃんの顔が明るくなる。木乃香ちゃん？あれ、もういない……だと??

学園長は頭から血を流していた。気づかなかった、いつの間にか？マジ何もんだよ木乃香ちゃん……。

「さて、ネギ。教室に行くぞ。」

「あの……学園長先生は？」

「きにすんな、いつものことだよ。」

若干引き気味だよネギ君。

そしてそこには死に絶えた妖怪と赤く染まった金槌だけが残った……。

「死んどらんわいつ!!」

ウルセエ

~~~~~教室への道~~~~~

「ネギ君」

「はい、どうしたんですか??」

「これから君は学校の教室に行くわけだ。魔法障壁はきれ。何時ばれるかわからんぞ。」

忠告してやるとええ!?!と驚いた。

「この学校には魔法を使う先生が多数いる。まあそこまで多くはないが、俺もその一人だ。何かあったら相談しろ。」

べ、別にアンタの為に言ってるわけじゃないんだからねっ!

……いかん。容姿と声に意外とあって鬱になりそうだ……。

そんな無駄な思考をしてる間に教室に着いた。

障壁がないことを確認してから手で入室を促す。

当然原作より若干俺用に強化された罫が待ち受けてる訳で。

原作の黒板消しの代わりに水入り金盥が降ってきたが流石にそれは俺が止めるが、そんなことは意に介さずネギは突き進むと濡れた雑



「「「きゃあああつゝゝゝゝ！！かわいいいゝゝゝゝ！！！！」」

「どこから着たの？」

「今何才なの？」

「頭いいんだあゝ」

ネギは質問の嵐に会っている。俺も通った道だからつらいのはわかるので助け船を出してやる。

「静かにしろ。朝倉、一時限目はお前が先行して質問に使ってくれ。どうせ授業にならん。」

「合点承知！任せて、レイン先生！」

出欠確認は俺が揃ってるかみて書いておく。

ふむ、キティはまだ来てない……か……。お仕置き確定だな。

「通達事項は特にない。俺は用事があるのでいないから、ネギは質問にでも答えといてやれ。以上、HRを終わる。」

ピシヤリと扉を閉めると教室は騒がしくなる。

とりあえずじじいのとこいくまえにキティを起こしてくるかな。

とまあそんなこんなで俺は原作へと足を踏み入れた。

十七話 神様との会合、そしてネギ襲来！！（後書き）

はてさて、今回無理矢理感が強くなった理由は簡単に言えば「ネギま！はキツイ！！」です。

自分は記憶力も悪いものですからほかの作者様の二次創作で知識を付けてもいざとなると忘れてしまったりと時間がかかるかも。

というわけで私の中で次の世界の最有力候補はみんな大好きフェイトステイナイト。

勢力に悩みます。創りがいがありそうです。

さて、今作「ネギま！」編は微アンチに決めました。  
肉体言語でOHANASHIはするけどそこまで本格的にアンチっ  
たりしません。

それでは皆様、また会う日まで、お元気で。

十八話 アレ殺っちゃっていい？b y 千雨（前書き）

投稿です。

入学式が近い！作者緊張しています！

十八話 アレ殺っちゃっていい？by千雨

俺は今、学園長室にいる。

理由はお分かりだろう、何故ネギ？スプリングフィールドをこの学園に來させたか、である。

キティを学校に送り届けたあとすぐにここに足を運んだ。

学園長室は扉も直り、室内の血痕も消えているし学園長も元気なのは何故だろう？

(話数が変わったからですよ)

変な電波を感じるが気のせいだろう。

「それでクソ狸爺、どういう事が説明してくれますよね？」

「じゃからネギ君はマギステルマギになるため……」

「そういう事じゃない。なぜあのクラスに放り込んだか聞いているんだ。と言っても予想はついているがね。このことを詠春は知ってるんだろうな？」

答えは否、そんなこととうに分かっている。

「い、いや。婿殿知ってて送った訳じゃし……」

「なら今度、学園長が木乃香ちゃんと魔法先生を同じ部屋に住まわせようとしていた、っていつてみようか？クククク、詠春の怒り狂う光景が目に見えるぞ？」

「む、むう……………」

こんな狸信用した詠春も悪いんだけどさ。

さすがに焦ったかじじいは冷や汗をかいている。  
と言ってもこれはあくまで脅し。実行する気なんてサラサラない。  
気に食わないが戦争が起きる引き金になるような面倒なことは滅多  
なことがない限りするつもりはない。

「ま、そんなことするきはないが、いつでも出来るという事を頭に  
置いてくんだな。」

「さすがの僕でも肝が冷えるわい。全くレイン殿には隠し事はでき  
ぬのう。」

「ハハハッ！おまえがわかりやすすぎるんだよ。改めて言うが生徒  
に危害が加わらない限り最低限手は出さん。もし何かあったら全力  
で対抗するぞ……？」

俺の目的はクラスへの魔法バレを極力減らすこと。仮契約は下等生  
物が来るまで心配はない。

だが、木乃香ちゃんと明日菜ちゃんはああ見えて面倒見がいいから  
ネギに積極的に関わることになるだろう。正直あきらめてる。

刹那にでも任しとけば問題ないだろ。生憎ヤンデレ木乃香ちゃんは  
刹那以外とキスはしそうにないし。

まあ難しい話はアレだな。

「んじゃ学園長（狸爺）さんよ、さよなら。」

手をひらひらと振り扉を開け出ていく。

この日から学園長……もとい狸爺の胃薬の使用量がふえたとか……。

その日の放課後……

ネギの歓迎会に呼ばれた。

それならいいさ。でもさ……

始まってから呼ぶなんてひどいじゃねえかちくしょー！！！！と傷ついた心を癒す為キティの近くへ。そこには真名、千雨、茶々丸、キティ。ちよい横に刹那とネギを快く思わないチームがいた。周りと違いギスギスした空気に耐えかねていると千雨が話しかけてきた。

「なあ、先生。アレ、大丈夫なのか？（私の平和的に）」

「いんや、レッドゾーンだな、（危険人物的に）。アレでも一応英雄の息子。重犯罪を軽く許しちゃうくらい世界では特別視されてるしな。」

ガクツと肩を落とす千雨。

しばらくするとブツブツ言いだした。

「……………殺しちゃった方が世界のためじゃね？」

「私もそう思うけど、そんな事したらこの世界で生きていけなくなるからやめといた方がいいよ。」

横で聞いていた真名が血迷ったかのような発言に呆れながらも意見する。

「しかし彼がレインさんの部屋にいたらレインさんにサービスできないじゃないか……。子供にでも裸は見せたくないぞ……。」

「おいちよつとまで、そんなこと考えてやがったのか？」

「私は弟子になれなかったからね。でもだからといって千雨、君に負ける気はさらさらないよ。」

「なななななんのことだよ？べべつに私はそんなこと……」

「ふふふ、分かりやすいよ。顔を真っ赤にして……ふふっ」

「う、うるせえ！」

ガールズトークに変わっているな……。さすがに入れないぞ。

今度は刹那のとき。刹那はストーカーよろしく木乃香ちゃんの後ろについて回っている。

ちなみに木乃香ちゃんは明日菜ちゃんをからかっている。

「あ、どうもレイン先生。」

「ん、そんなストーカー紛いな子としてないでいったらどうだい？」

「ストーカーじゃありません！……レイン先生。貴方は彼をどうみますか？」

それは俺からの印象か、木乃香ちゃんへの影響か……。まあ十中八

九後者

だろうけどね。

「木乃香ちゃんのことを考えるなら、そこにいるだけで害になるたろうな。彼の魔法隠匿への意識は皆無に等しい。初日ですでに明日菜ちゃんへバラしている。………おいまで叩き斬ろうとするんじゃない！外交問題になるぞ……！」

意を決したように深呼吸すると野太刀に手を掛けネギの方へ向かう。

「しかし彼はこのちゃんの敵……！」

「だああああ！だから落ち着け！！野太刀を抜こうとするな！！」

半場暴走状態になった刹那を押さえつける。

いかん、最近木乃香ちゃんに優しくされすぎたせいがこのちゃんし  
OVEのレベルが上がってる気がするぞ！

「ふう〜〜。すいません、取り乱しました。しかしコレで以前  
貴方が言っていたことの確証が取れました。」

「お、覚えていたのか？結構結構。同じ部屋になるのはなんとか止  
めたからもう木乃香ちゃんとなかよくしまえ。アイツならお前も  
受け入れてくれるさ。」

そういうと興奮していた雰囲気がかえ目に見えてテンションが下が  
っていく刹那。しまった！まだいづべきじゃなかったか？

気まづくなったのでとりあえず持っていたワインを勧めると無言で  
飲みだした。

〜〜10分後〜〜

「ひつく…わたひだってこのちゃんとなかよくしたいんよ。でもな  
あひつく、おさもおさで無責任すぎるんとちゃうの?!なあ、れい  
んしえんしえい」

刹那が酔っぱらった……。

聞かせてくるのは本音1割と木乃香ちゃんへの絶賛。

つ、つらい……まさかここまで酔うとは思わなかった。

「それでこのちゃんはなぐめつちやかわいいんよ」

未だ話し続けてるがその場を抜け出す。酔っぱらいは嫌いだ。

ラストに向かうはキティに場所へ。

「よお、楽しんでるか？俺にもくれよ茶々丸。」

「かしこまりました。」

「騒がしいだけじゃないか。まったく、アレがナギの息子かと思うとイライラする。しかし呪いを解くにも血がいるし虐めてみるか？」

口元にサディステイックな笑みを浮かべながら茶々丸に注がれたワインを煽る。しかしこんな堂々とワインを飲んでていいのか？見た目小学生のくせにさあ。

「あ、そっぴや呪いさあ」

「ん？なんだ？」

「俺でも解けるぞ？」

ーっピシッ

キティの持つグラスにヒビが入る

「いま……なんて？」

「んだから今キティに掛かってる呪いくらい楽勝だよ。俺の能力と目を忘れたのか？呪いの「死」も「目」も見えるし壊せるぞ。」

「そうだったああああああ！よく考えたらレインの能力で壊せないわけないじゃないかああああああ！！！！」

はあ、そう落ち込むなよ。む？

「おい千雨、ちょっといい。」

「なんだよ今度は……。」

「アレ、なにやっているとおもっ？」

俺が指を指した先にはタカミチの頭に手を当てているネギの姿。

「あれは……読心魔法じゃないか。禁止魔法の上、こんな場所でやるなんてふざけてんのか？」

「ああ、だがな。ネギは他にも禁書庫への不法侵入に記憶を消す魔法、それに町中での武装解除と普通の魔法使いならおこじよ刑は確実な事をやりまくってるんだが全てが注意に終わってる。それがどんな事か分かるか？」

「……英雄の息子なんだろ？つまりその看板に傷を付けたくないのか？」

「エクセレント。魔法学校主席もその影響が大きいだろうな。一般常識も身に付けてない奴が主席になれるわけがない。」

「はあ~~~~」

「めんどうだな。」

「同感だ……。」

結局その日は厄介な事実が明らかになりまくりだった。

キティの呪いはパキッとさくつと解くことにきまった。楽しみだなあ。機嫌がいいキティ。

~~~~別荘~~~~

来たのはと〜ぜんナギの掛けた呪いを解くためだ!!

掛かっている呪いは無茶苦茶な魔力でかけしかも掛け方がテキトーすぎて絡まった登校地獄だ!!

「お〜これはすげえな。鳥頭のアイツが掛けただけあって最早別の術式になってるぞコレ。俺が生きてきた中で一番すげえ呪いだよ。」

キティをイスに乗せて術式を観察している。

「お?なあキティ、お前が掛けられた呪いってホントに登校地獄だ何か?」

「うむ、他に何かあればさすがに気づくぞ。」

あ〜なるほろ。こりやまたエグいことをしゃがりますなあ学園長さんよ。

「よく考えるキティ。登校地獄に魔力を封印する効果があるか?」

「ん?いやないな、ってまさか…!」

「ああ、後から別の呪いで魔力が封印されてる。しかもバレないように思考誘導魔法付きだ。」

「なっ?!あんのクソジジイ今まで騙していたのかっ!!!」

キティは怒りを露わにしている。無理もない、封印されて解除を頼んでいるにも関わらずされていたのは正反対のこと。

んと、魔力の行き先は〜？？

「キティから掠めとった魔力はこの学園の結界に流されているようだぞ。結界の仕組みは電気を利用した科学的な結界。キティが気づかないのも無理はない……か。」

「おのれクソジジイ！！！！いつか絶対殺してやるっ！！！！」

「死」と「目」って能力的にかぶっているよな、今更だけどさ。目の方が今回は確実に壊せるからそっちを使うかな。

ーーーーバチンッ

小さいものが潰れるような音と共に登校地獄は消える。

「ちょいごかんてくれ。まったくこういうのは専門外なんだけどなあ。」

ーーーーバチンッ

「痛っ！」

「おおすまん、力づくだったからな、すまん。」

「ふふふふふ、フハハハハハ！！！！やっとだ！やっとこの忌々しい呪いが解けた！感謝するぞレイン！！！！」

大したことしてないがこの30年振りに見る機嫌のいいキティの為ならやすいもなにも喜んでやってやるぜ！！

焼き増しして配った方がいいかな？茶々丸のは絶対だとして、うん。

あり？そういえばかなり前から忘れてるものがあるきが……。

「オイ、俺ノコトワスレテタダロ！……無視スルナ！オイレイン！
ご主人ハ…ムリカ。」

「ふふふ、忘れる分けないじゃないか。安心しろ。少し待てば好き
放題暴れられる時がくる。」

「マタ予言カ？マア当タルカラカマワナイケドナ。ケケケケケケ、
久々ニナイ血ガタギルツテモンダゼ！！俺ヘノ扱イノ悪サトカスト
レスヲブツケテヤルゼ！！」

「そうしてくれ。」

チャチャゼロはまだ見ぬ未来に期待を寄せてる。

ん？茶々丸はどこへいったんだ？

そう思いキティの騒いでる端っこの方に特徴的な緑髪をみつけた。

「ああマスターがあんなにも嬉しそうに……コレは永久保存版です
ね。」

なんか末期だな。

あれで自分には心がないとかほざきやがりますからな。ん、今日は
楽しむか……

そんなこんなで幸せなテンションが上がっていた二人は気づかなか
った諸事の中ドアの隙間から見ていた機械的な瞳に。

そしてその保存された動画を見て二人のマッドサイエンティストが
羞恥に鼻血を出して気絶したことを知らない！

十八話 アレ殺っちゃっていい？b y 千雨（後書き）

まあ今回はいろいろまとめてみました。

処分を受けたネギ君？新田先生に似た性格に仕上がりました。しかし少し真面目になっただけだよ？

魔法についてはいろいろいえません。

今回はあまり言うことがありませんね。

では皆様、また会う日まで、お元気で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6821p/>

世界を跨ぐ英雄

2011年9月4日22時20分発行